
幻の月は空に輝く

国見炯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻の月は空に輝く

【Nコード】

N4316S

【作者名】

国見炯

【あらすじ】

子供を庇って死んだ私。生まれ変わった先はNARUTOの世界。しかも、原作にはいないはずの私がナルトの親友。なんていうか、元々この世界に生まれたからにはナルトの親友のポジションを狙ってたから、隣に立つても自然なようにあえて性別不明。寧ろ男に見えるようにしてたんだけどね。そしたら見事に気付かれない。それは問題ないんだけど……影獣って何？裏人柱力って私ですか。転生した最強主人公がスレたナルトと親友になって、原作破壊をしていくお話しの予定です。原作突入するまでが長いです。主人公

最強＋スレナルです。原作で死ぬキャラが生き残ります。この設定が嫌いな方は注意して下さい。5/10ユーザー名をメインのものに変更しました。

始まり（前書き）

主人公の始まり編。

始まり

過去を振り返ってみて。

結構ヤンチャ、だったかな？

と、思わなくもない。

他には、十分恵まれてたんだとか。

もっと大切にしたかったな、とか。

そういえばあのマンガの続きはどうなったかなあ。

なんて思いながら、薄っすらと目を開けてみれば、これ以上ない程悲痛な父親と、泣きはらした顔を隠しもしない母と姉。

ああ、うん。ごめんね？ 現実逃避をしてたみたいだ。
もう、逃避出来る現実も残されてはいないんだけど。

手を伸ばそうとしても、管をつけられた腕は如何せん動かしづらい。例えば管をつけていなくても、元々動かないだろうっていう今更な突っ込みは、この時ばかりは勘弁。

最後に。
最期に。

大切な家族に触りたいんだ。

大好きだって。

親不孝でごめんねって。

でも、幸せになってと言いたいんだ。

頭の片隅で、子供の泣く声が聞こえる。

元気そうな声。

無事で良かったと、最期の時にこんなふうに思える自分で良かった。

自分の痛みに敏感で。

傷つくのが怖くて。

勝手に壁を作って。

親ですら他人だと、心のどこかで思っていた。

きつと話した所で解ってはもらえないのだと、自己完結していた。

ああ。

うん。

ほんとに大好きだ。

私の心を読み取ったかのように、指先に触れてくれる温もり。

本当に大好きだ。

幸せになって。

それが言葉になったのか、声に出せたのか。

答え合わせなんて出来ないまま、私の短くも長くもない一生が幕を閉じた。

出会い

誰かが優しく擦ってくれる。

直接じゃないけど、それでも撫でられてるってわかる感触。
慈しむように優しく優しく。

身体のはきはきかないし、目もあかない。けれど、愛されてるって確認だけはあって、その優しい温もりと声に包まれながらも私は、毎日何かの中をたゆたうという日々を過ごしていた。

声は、女の人の声。

時々男の人の声も聞こえるけれど、女の人よりも頻度は落ちる。でも、男の人でも私が大好きでたまらない。女の人でも大好きだっていう気持ちを垂れ流し状態。思わず何処かのバカップルか？ って苦笑いを浮かべてしまうけど、こういう雰囲気は嫌いじゃない。

どのくらい経ったのかな。

どうにもこうにも、時間の感覚がすっかりと鈍り果てた私は、今日も温かな中でその温もりと優しい感覚を十分に堪能していた。

いつもと違ったのは、女の人と男の人以外の存在が近くにいて事。多分、この気配は前々から感じていたんだけど、気にしてなかったってというのが正解。

まだ、あんまり手が動かないんだよね。

最期の時と違って、あんな管だらけの腕じゃなくて、純粹に動きが鈍いって感じの動かなさ。不快じゃないから気にしてないんだけど。

というか、一回死んでみればわかる。

少しの事じゃ動じないですよ。

けれどその小さな気配に心引かれて、私は一生懸命指先を伸ばしてみた。

例え届かなかったとしても、自分的には大がつく快挙的な事をやってのけている。つもりになってる。

うーん。しかし、こうしてみると動かないっていう事はやっぱり不便だ。

ふごふごと間抜けな声をあげながら（つもり）、私は日々小さな気配に近付こうと努力してみた。

すると、女の人が驚いた気配がした。

ん？ 驚き？？

「アナタ。動いたわ。嵐誓ランセイが今動いたのよ」

「ああ、本当だ。俺たちの可愛い赤ちゃん。元気に育ってくれよ」

へえ。赤ちゃんが動いたんだあ。

そりゃ良かったあ。

.....。

長い、長い沈黙の後、漸く私は首を傾げるに至った。
いや、だってさ。

女の人その言葉って、超がつく程の重要さを含んでなかった？
いやいやいやいや。

決して私が鈍いわけじゃなくてね？ 本当に鈍いんじゃないかってね？

まっさか、記憶持って生まれ変わって胎児をやってるなんて思わないって。

けれど、そう考えれば全てに納得がいく。

温かでぬるま湯に浸かっているような安心できる場所。

私を愛してくれている女の人と男の人。ちなみに、この間も相思相愛と見た。

で、開けられない目と動かない身体。

胎児そのものですよー。

あっはっは。今更だけど。

で、漸く自分の置かれている状況に気付いた私だけど、特にやる事に変わりは無かった。ああ、一応ね。赤ちゃんってどんなかな？なんて思い出していたわけよ。

だって、私の知識を存分に活かしたら異端でしかないし。

そのぐらいはわかるよ。だって、そういう小説も沢山読んでたし。まあ、せめてもの救いといえば、トリッパーじゃなくて、転生だった事かな？

トリップなんかしたら行方不明で両親泣かせるし。別の意味で思いつきり泣かしたけど、それにはあえて触れない方向で。

大人になってからトリップなんてどうしようもないし。

赤ん坊からだったら、泣いて母乳…という羞恥プレイを強要されるわけだけど、それにも目をつぶってつぶってつぶりまくって、生まれる前から考えるのはやめておく。

しかし、新たな情報を得た私は改めて、小さな気配を探してみる。

一瞬双子かな、とも思っただけ、とりあえずそれはすぐさま却下した。双子って感覚じゃなくて、まったく別物の生命を感じたからだ。

けれどそう考えると疑問もある。

ここは明らかに羊水の中。まだ目が開けられないから視覚からの情報を得る事は出来ないけど、まず間違いないと思う。

つまり、そうなる私以外の気配って何だろう？という疑問に到達するわけです。やっぱりふごふごと間抜けな声を上げながら、一生懸命小さな気配に向かって手を伸ばす。

普段だったらあり得ないと思った瞬間、ひいてた。

怖いという感情が先行して、きつと見てみぬ振りをした。

でも、一回死んで生まれ変わってみたいなんかすると、ちょっとの事じゃ動じなくなるっていうかね。

多分っていうか絶対、あの時の自分のスプラッタの方が怖かったしね！

まあ、その辺りのちまちまとした逃げない理由は横へポンツと置いていて…。

ぶっちゃけ、弟か妹がほしかったんだよね。

残念な事に私は末っ子。多分長女長兄だったら今とは逆な意見だという事もわかってるんだけど、それでも、私は弟や妹という響きに憧れてたのだ。

そりゃ、勿論従姉弟もいたよ。可愛がりまくって、懐いてくれて可愛いーってなったよ。従姉弟も可愛いけど、なんだろう。そうじゃないんだよね。

従姉弟が可愛ければ可愛い程、憧れるんだって。

私よりも小さな気配。

絶対に弟か妹だ！

思い込んでいた私は、来る日も来る日も飽きずに腕を伸ばす。最近では腕だけじゃなくて身体全身を動かしてただけど、何でもかまったく諦めずにうごうごと動いて小さな気配に少しでも近付こうと頑張ってた。

どうしてこんなに頑張るのか。

自分でもまったくわからないけど、心の奥底から頑張ってた近付くぞー、なんて思ってしまったのが悪かったのかどうか。

「（うぎいいいいいい！！！！）」

気分的にはジタバタと。

お母さん、らしい女の人は時々しか感じないらしく、お父さん、らしい男の人と元気な子ねって楽しげに話してる。

そうだね。このジタバタを常に感じてたらお腹が痛くなるよね。ちょっとは自重しようかな。

流石にお母さん、を苦しませるのは本意じゃないし。

「（でも悔しいiiiiiiii。遊ぼうよおおおお）」

声にならない声で、気配に向かってこれ以上ない程念じてみる。最後。そう、これで最後。

でも、駄目だったら諦めようとかそんな事は何も思わなかった。

最後になる指先を伸ばし、気配に向かって腕を動かす。頭を撫でられるように。可愛い可愛いって頭を撫でて、ギュッと抱きしめられるように。

私の中では、この小さな気配は私が守るべき対象になってた。どうしてこんなふうに思ったのか。

それは自分でもわからないんだけど。
まだ生まれてもないのにね、とちよつと笑っちゃった。

んー、と体力の許す限り手を伸ばしてたんだけど、やっぱり胎児の体力。あっさりと限界が訪れ、蹲るようにして背を丸めてしまう。そしてうつらうつらと意識が混濁してくる。もう起きてられない。

「（ううー…私の弟妹…おやすみー…）」

それでも、意識が飲み込まれる寸前に、私は小さな気配に向かつて微笑みかけた。

《ランセイ…？》

と思つたら覚醒した。

だって、小さな子が名前を呼んでくれたんだよ！

私の名前予定を。

「（うんうんうん。これから貰う名前だけど、ランセイになると思う！ はじめまして……えつと……）」

小さな子の名前がわからない私は、ここで言葉に詰まった。

あれだけ追いかけていたのに、名前すらわからないなんてと衝撃を受ける私に、小さな子は多分だけど、私の横にちょこん、と座ってくれた。

《天禍。天の禍だ》
ワザワイ

「（天禍…？　ワザワイ？　んんんんー）」

《……………》

名前。

天禍の名前。

問題は禍の部分かな。

こんな時目が見えないのは不便なんだなって思ったけど、私は目が見えない代わりに身体を使って天禍を抱きしめた。

うん。暖かい。

「（じゃあ、天華で。天の華。髪の毛はふわふわ。肌はしっとり。テンカは可愛い。私の可愛い弟妹だ）」

テンカの声が沈んでいたような気がして、私なりに動かない脳みそを使いまくったんだけど、テンカからの反応は特になかった。その途端不安になる心。

《天の華、弟妹か。我は…いや、ランセイ。今日より、我とお主は姉弟だ。その証として、そなたにのみ、我は天華となるう》

なんていうか、多分つつこみ所は色々とおったんだと思う。

けれどこの時の私は、弟妹——どっちかわからないけど、まあ、いつか——が出来た事に浮かれまくって、まったく気にならなかった。

ちなみに、弟妹が出来た喜びの次の日、私は衝撃的な事実を知る事になるんだけど、そんな事はまだもう少し先の話。

私は、天華を抱きしめながら、穏やかな気持ちで眠りへと誘われ

て
い
っ
た
の
だ
っ
た
。

衝撃（前書き）

主人公悩み編。

衝撃

ふふふふん、とリスミカルに鼻歌を歌いながら、私は天華と沢山の話しをした。

教えてもらった所によると、天華は狐さんらしいですよ。

ほうほう。狐さんとな。

私にへら、と頬をだらしがなく下げて笑っていたら、銀の毛並みだと教えてくれた。人間の姿にも狐の姿にもなれるらしいんだけど、どちらでも色は銀になるんだって。テレビとかじゃあるけど、直接は見た事ないんだよね。綺麗なんだろうなあって言ったら、照れたように私の頬を舐めてくれた。

うむ。流石私の弟。私のツボを心得ておるの。

という冗談はさておき、天華は弟だったのですよ。あれ？ 天華… 華？ まあ、いつか。一回死んでからというもの、物事をあんまり深く考えなくなったような気がするけれど、今の所困ってないから大丈夫。

といっても胎児だけだね。存在感のある胎児だよな何かも、胎児そのものを見た事がないからわからないけど。

ちなみに、最近凝ってる事といえば、お母さん…の話しを聞く事。耳をすましてみると、結構色々な情報。井戸端会議レベルだけどね。仕入れられるんだ。

なんていうか、あんまり聞きなれない単語なんかも飛び交ったりするんだけど、物語を聞いているようでそれも楽しんだりしてる。

「ふふ。アナタの所とどっちが早いかしら？」

む。今日の会話は妊婦さん同士かな？

私が意識を戻してからそれなりの時間は経過したと思うんだけど、流石によそ様の子と自分を比べるのは如何なものだろうかと思う。

この状態のまま生まれて育てば、麒麟児じゃなく、ただの異端児ですよ。鬼才っつーか鬼子っつーか。まあ、弾かれそうな赤ん坊な事は間違いないし。

比べるというよりも、参考にさせてもらっ、が正解かな。

「そうね。この感じだと…セイカの方が早いんじゃない？」

ほう。私のお母さんはセイカというんだね。

お父さんとお母さんの会話って、固有名詞がまったく出てこないからわからないんだよね。ぶっちゃけ、他者が入り込めないダーリン・ハニーの世界だし。それにランセイって単語が頻繁に混じりつつ、愛しげにお腹を撫でる感じかな。

「ランちゃんの方かしらね。でも、クシナの方も順調そうよ。ミナトさんは帰ってこれそう？」

「うーん。どうかしらね」

へえ。クシナとミナトっていうんだ。お母さんが話している女性と旦那さんは。

……………。

少しの沈黙の後、なんとか思考を整えてみる。

へえ。クシナとミナトね。

日本人っぽくないのかな。どうなのかな。

.....。

さつきよりも長い沈黙だったけど、まだ諦めない。
未来の日本だと思ってるしね。あくまでも日本だと思って思ってるからね。

「早く任務から帰ってくるといいわね」

と、お母さんの声が聞こえて、私は無言になる所か口をぽかんと開けたまま間抜け面を天華に披露しつつ、ギギギと不自然な音をたてながら天華の方を向いた。

ちよつと確認したい事が出来ちゃったかなあ。

未来の日本の割りに、やけに古風な単語が飛び交ったような気もしたんだけど、きつと私が死んでる間に色々あったと思ってたんだよね。寝物語を聞いているみたいだったから尚更深く考えなかったというかね。

でも大丈夫。

まだ胎児。

修正ならば幾らでもオツケーなはず！

なので天華に質問を投げかければ、ちよこんと首を傾げられた。
雰囲気でそのぐらいの仕草の事はわかるのですよ。

《ここは火の国の木の葉隠れ里だ。ランは、忍を知らぬのか？》

不思議そうに。本当に不思議そうに聞かれたんだけどね。

まだ胎児だからね。生まれてないからね。見た事ないんだよーつて言えば、天華はやっぱり不思議そうだったけど、とりあえず納得してくれたみたい。

気持ちはわからなくもないんだけどね。これだけ喋る胎児はいないだろうし。

《……我は、長い事宵闇族の内に宿っているが、ランのような意志のある胎児には初めて出逢った。故に、知っているかと思っていたのだが》

うん。他の胎児に会った事はないけど、私みたいな胎児はいないと思うよ。

天華の言葉に返答しながら、私の頭の中では色々なものが総動員されての緊急会議中だったりもする。

火の国って言ったよね。

木の葉隠れ里って言ったよね。

忍っていったよねー！

……………。

たっぷりと。本当にたっぷりと沈黙をかました後、私は意識的に天華を抱きしめた。

「（天華。私はね、こことは別の世界で死んで、ここに生まれてきたんだよ。何故か意識はあるし記憶は失われてないけど……ここの常識は知らないの。ここではない世界から来たからね）」

私のいた世界の、漫画の中の世界、とは言わなかった。

だって、私はここが漫画の中とは思えないもの。現実に皆が生きて、日々の暮らしを営んでいる。

《ふむ。宵闇族は特殊故、そういう事もあるう。それに……だからこそ……》

「（天華…？）」

珍しく齒切れの悪い天華。

さつきから宵闇族って言葉も気になるんだけど、なんとなく雰囲気的にまだ聞かなくていいかなー。と思わなくもない。

だから、今は聞かないでおく。

だつてさ。

既に、私という存在がイレギュラーでしょ？

本来なら在り得ないと思うし。

私がこの世界で、通りすがりAという存在ではないだろうと思える証は、天華の存在かもしれない。

クシナさんがいてこれから出産なら、天華は九尾じゃない。でも、天華は狐だ。意志をもった、人の身体に宿る不思議な存在。それと同時に私の大切な弟。

NARUTOを思い出し、私はゾツとした。

主人公のナルトに対する里の人間の対応の冷たさ。九尾の事件の後、里の英雄である四代目の息子のナルトは、父親と同じ英雄にはなれなかった。

多分、里を壊し多くの命を奪った九尾への嫌悪が先立ち、怒りと憎しみの矛先をただ九尾を宿らせられただけのナルトに向けた。私は漫画を読んでてそう感じてしまった。だから、小説でアンチ里の人間なんていうものは結構読んだりもした。読んでて、あの態度にはものすつごく腹がたったのだ。

大人しく私の腕の中に収まってくれている天華を更に強く抱きしめ、深い深呼吸をして身体の中の空気を入れ替える。

平和な現代から生まれた私が、天華を護れる強さを身につけられ

るだろうか。

天華がいなかったら、ただの通行人Aの私が、強いチャクラを身につけられるだろうか。

《ラン》

「（……ん？）」

私の不安を感じ取ったのか、天華が腕の中で身動きしながら私を見上げてくる。

《ランは私の姉。私が護ろう。ランは何一つ不安に思う事はないのだ》

「（………）」

嬉しい。嬉しい天華の言葉。でも、ね。

「（天華。天華の気持ちはすごく嬉しい。でも…私も天華を護りたいんだよ。両親を護りたいんだ。そして…）」

《………》

ナルトの親友になりたい。だなんて。

まだ出会ってもいないのに、私の脳裏に浮かんだ言葉。それは言葉にしないまま、私の中へと消えていく。

思考の渦の中へと突入した私は気付かなかった。

天華がジッと私を伺うように、心配そうな眼差しを向けていた事に。

そしてこの一連の会話が、何があっても、何を犠牲にしても私と私の大切な人だけは護ると、天華に決意させていた事に。
今の私は気付けなかった。

誕生

母親のお腹の中で色々と得た情報に一時パニックになった私だったけど…。

やはり、一度死んだ人間は強かった。

うん。驚くべき立ち直りの早さ。チャクラ云々を悩むのはもう少し後で、私はとりあえず天華と交流を深めながらこの世界の事を天華から聞いてみた。やっぱ、基本は漫画と同じ。

宵闇の一族や私や天華の事は保留。大きくなればわかってくるでしょ。って事で今は考えない。その前にやる事あるし。

まず、ちゃんと生まれなきゃね！

そんなふうを考えてかなりの時間が経ったのかな。

私は、無事元気な産声をあげてた。

「ランセイ！」

父親が嬉しそうに私を抱き上げる。生まれた時の衝撃や苦しさで私は赤ちゃんらしくおぎゃー、とけたたましく泣き叫ぶ。

いい年した大人が情けない、と思わなくもないんだけど、本当に痛くて痛くて苦しくて。呼吸の切り替えがこんなに激痛とは思わなかった。

まだ、多分まだね。安産型だからマシだとは思っただけど、これは辛いわー！。

えぐえぐと涙と鼻水を盛大に垂らし、私はお父さんの胸に頬を擦り付けた。何かを掴んでるとちょっとマシになる気がする。

胎児生活が長かったから眼の開き方も忘れたし、身体の動かし方も忘れたから動きはぎこちないけれど、お父さんはわかってくれたらしく、私の背を優しく撫でてくれた。

お腹の中で感じてた、温かくて優しい手の平。

綺麗に拭かれて、私はお母さんの横に置かれた。目の前には疲れた表情のお母さん。けれど、やりきったと、仕事を終えた表情を浮かべてた。声は知っていたけど、初めて見るお母さんとお父さん。

本当は複雑な想いがあるんだけど、それを今言った所で仕方ない。私はランセイとして生まれたんだから。

誕生と同時に気分一新。新たな決意と共に、私は夜月ランセイとしての生を歩みだした。

ちなみに胎児の頃に思った通り、両親は熱々なカップルで、親馬鹿だった。

お仕事はどうしたの？と赤ん坊の私が心配になるぐらい、両親が揃ってる。生まれた日はわかる。でも、次の日も次の日もその次の日も、何故かお父さんがいる。

「うー」

あんまり自由にならない手をお父さんに伸ばし、お仕事大丈夫？なんて思いながらちょこんと小首を傾げてみる。

すると、お父さんは感極まった表情を浮かべながら遠慮なく涙腺を緩ませる。だばだばーと滝が流れるような擬音がぴったりの涙の流し方。

「あう？」

ちょっと怖い。生前の私と同じぐらいの男の人が滝のような涙と、鼻水を垂らしながら擦り寄ってくる光景は、やっぱり結構怖い。

お父さんと言っても私がひいているのがわかったのか、いつのまにか忍び寄ったお母さんが、手に持っていた扇子を右上から左下に一閃させる。すーん、とお父さんの後頭部からいい音が響いたなあ、って思ったんだけど。

思ったと同時に私はお母さんの腕の中。

そしてお父さんは地面とお友達。

……あえて突っ込まずにいいのかな。うん。

「ランちゃんに涎や鼻水がつくでしょ。まったく。仕方ない人なんだから」

語尾は弾ませているんだけど、何でか容赦なく聞こえるのは何故だろう。

うん。つつこんじゃいけない領域だよな。

再度その事を確認した私かというと、お母さんに抱っこしてもらったのを良い事に、またウトウトと惰眠をむさぼる事にした。

眠るのが本当に気持ちがいい。

真綿で包まれているかのような温かな寝心地。幸せな気持ち。赤ちゃんは眠るのが仕事だっていうけれど、まさしくその通りと実感せずにはられない。

ここが外だという事も忘れて瞳を閉じ始めた私に、お母さんはあら、なんて言いながらあやす様に背中を優しく撫でてくれる。それが尚更睡魔を加速させるんだよなあ。気持ちいいなあ。

私の眠りを阻む存在などいるはずもなく、遠慮なく意識を沈ませようとした瞬間、女の人の声が耳に届く。お腹にいた頃聞いた事のある、女の人の声。

そして初めて聞く男の人の声。

「あら。クシナとミナトさん」

お母さんの発した名前に、私は沈みかけていた意識をいつきに浮上させる。

そういえばすっかりと忘れてた。

ただでさえ大きな瞳を更に見開き、私はクシナさんとミナトさんをジッと見る。お腹はまだ大きい。だからナルトはまだ、生まれてない。

生まれてはないけど、近い将来必ず起こる事がある。それを、私は知っている。

私の揺れだす心に気付いたのか、お父さんが顔を覗き込んできた。けれど、私の瞳は揺れてそれに反応を返す事が出来ない。

教えないと！

でないと、ミナトさんとクシナさんが死んじゃう！

普段は大人しい私が手足を懸命にジタバタと動かし、口をへの字に曲げて表情を歪める。お父さんは驚いたように眼を見開き、お母さんは私を落ち着かせるようにあやす手の動きを早くする。

けれど、私の動揺は収まらない。

伝えたい言葉は音にはならず、泣き声として辺り一帯に響き渡るだけ。

「ふえええええ」

もどかしい気持ちに逸る私の心。

本当は色々と考えてた。

この世界を生きるにあたり、を考えてたんだけど――…けれど赤子ライフを過ごすうちに暢気に思っていた自分もいて、それに気付いた瞬間我を忘れたように叫んでた。

いい年した大人が情けないけど、精神が身体に引つ張られた状態
というかなんというか。年甲斐もなく喚き散らしながら、私は逃げ
て逃げてと何度も訴える。

「ランセイ。嵐誓。大丈夫よ。アナタの言いたい事はわかるから落
ち着いて。ね？」

ジタバタと手足を動かす私の目の前にはお母さん。クシナさんと
ミナトさんも心配そうに私を見てくれる。

お母さんの翠色の瞳に、赤ちゃんの泣き腫らした顔が映るけど、
これは私なんだよね。

ああ。これは見ていて痛々しい。

ぐすん、と鼻水をすする私に、お父さんが柔らかな布で頬や口元
を拭ってくれる。やっぱり赤ちゃん。言葉で伝える事は難しい。

けど、お母さんもお父さんも神妙な表情を浮かべたまま、二人に
向かって一回だけ頷く。意味深なやりとりだったけど、何故か私は
睡魔に抗う事が出来ず、泣き腫らして腫れぼったい瞼をゆっくりと
閉じながら、ギュツとお母さんの服を掴んだ。

力を込め過ぎて震えだした小さな手を、お父さんとお母さんが優
しく握ってくれた感触に安心しながら、私の意識は完全に眠りへと
落ちていく。

何故か伝わったと、そう思ってしまったのだ。

天華が私の体の奥底で、くうん、と一回だけ鳴いたんだけど、こ
の時の私は疲れ果てていてそれには気付けなかった。

けれど無意識に小さな手を伸ばして、天華の身体を包み込む。胎
児時代に培われた、天華に関しての条件反射。頭で考えるよりも先
に身体が動く癖。

ぎゅううう、と無意識に天華の身体を抱きしめ、今度こそ私の意

識は完全に途絶えたのだった。

結果

ゆらゆらと陽炎のように揺らめく私の意識。

今の私は、銀色と蒼い眼を持つランセイの姿。

けれど一つ違和感を覚えるのは、二十歳前後の大人の姿だという事だろうか。

目の前には、お父さんとお母さん。

ミナトさんとクシナさん。

私の横には天華。

不思議な光景に、これは夢なんだと思った。

「ランセイ」

お父さんが口を開く。

「〜?」

私は寝ぼけたような夢現な眼差しを向けながら、ほんの少しだけ

首を傾げる。

どうしてかはわからないけど、上手く言葉を紡ぐ事は出来なかった。

「予言を視たのね」

今度はお母さんが口を開いた。

予言って何の事だろう。それを言うなら予知じゃないのかと天華を見るけど、天華も無言のまま私を見上げる。

「クシナとミナトさんに関わる事。そして、この里に関わる事」

状況が掴めていない私に、お母さんが更に続けた。けど、私が言いたかった事を言ってくれたからコクリコクリと頷き、態度で伝えなかった事を表してみる。

姿だけが大人で、実際はまだ赤ん坊の機動力しかないらしい。

視えてないよ？

ただ、知ってただけ。

その言葉は言えず、私は白い光に包まれていく。

「うゝ」

小さく唸る私の頬を、何かが舐めてくれる。

感触がくすぐったくて、右、左に顔を動かして何かを探してみる。すると、そこにいたのは銀色の狐。視覚で確認した事はなかったけど天華だ。私は確信をもって、天華に手を伸ばした。

やっぱり小さな私の手。

天華はその手に身体を摺り寄せるように、私のお腹の横辺りで丸くなった。可愛いよ。可愛いけどね。状況がまったく掴めません。一体どうなったの？と両親の姿を探してみたら、私に微笑を向けていてくれるお父さんがいた。

「天禍は、ランセイを選んだんだね。予言通り嵐誓を継ぐ、ランセイを。君はこれから渦中に巻き込まれるかもしれない。その前に、俺は君に俺の全てを教えるよ」

けれどお父さんは、一方的に私に言い聞かせるように。

うつん。違う。自分に言い聞かせているように苦しそうに眉間に皺を寄せて、組んだ手にギュツと力を込めていた。

そんなお父さんから目が離せない私は、不思議そうにお父さんを見つめながら、最近お決まりになった動作だけど、小さな手をお父さんに向かって伸ばしてみる。

多分。

多分ね。

イレギュラーな私はイレギュラーらしく、自分が関わると決めた場合はただ生死の境をさ迷うのかもしれない。きっと、そんな目に合うんだと思う。

でも、ま。人生は慣れだよ経験だよ。

一回死んだ私だからこそ、死というものの怖さはわかんと思うけど、逆に開き直ろう。ウジウジと考えてても仕方ない。

だからねお父さん。

私に沢山沢山教えてね。

そんな意志と願いを込めて伸ばされた私の小さな手。

お父さんはギュツと掴んで、ああ、と小さく呟き頷いた。

結局この時の記憶は曖昧で、詳しくは覚えていない私がいたりするわけだけど。

なんとなく、夢の中の内容と混ざり合って、あやふやな状態のままだけどしっかりと心には刻み込まれていた。

この日を境に、天華は何故か銀色の小鳥の姿で、常に私の肩に止まるようになった。人柱力や尾獣に恐怖を抱く人間がいる里で、狐の姿は神経を逆撫でするかもしれない。天華も、両親もそんな結論に至ったのだらうと思う。

そして、私が生まれて数カ月後。

ナルトの誕生の日になった。

ちなみに、私の身体は赤ん坊のままなので特に出来る事はなく、全部天華任せになってる。

この件に両親が関わると道筋が大きく変わるという事で、こっそりと秘密裏に、誰にも内緒でナルトの両親を助けるとか。

勿論、二人とも死んだと思わせたる為に、天華の力で死ぬ直前に救い出し、そのまま異空間へと眠りにつかせた。

騙す為に、幻術をかけたらしい。

私が直に見たわけじゃないから何とも言えないけど。

概ねだけど道筋は変わらないと思う。

そして、瀕死の重傷を負ったミナトさんとクシナさんの生死については、誰にも喋ってはいけないという事。

人に話せば惑わせた力に綻びが出来、天華が細工した事が台無し

になる上に異空間で眠りにつく二人もその時の状況に逆戻りするか。

即ち、死の直前の二人はそのまま死ぬだけ。

だからこれは、二人の傷が完全に癒えるまで私と天華だけの秘密。

九尾が暴れた木の葉の里はほぼ悲惨な状態。

里は四代目であるミナトさんを失い、九尾はナルトに封印された。

これが、私が天華から聞いた今の木の葉の里の状況だった。

意外なフラグ発生

九尾来襲事件から早5年。私もそれなりに大きくなった。
ちなみに、ナルトとは会えておりません。そろそろ天華の術が安定するだろうと思うから、会っても問題ないと思うんだけどね！。

「ラン。余所見してると危ないぞ」
「——と」

お父さんが刀を一線させるけど、それを半歩右斜め後ろに下がる事で体勢を崩さずに避ける。勿論刃先から目を逸らす事はしない。そのままステップを踏むように振り下ろされた刃に沿って前へと足を踏み出し、お父さんの鳩尾に掌底。

が、避けたはずの刀をそのまま横に一線され、私は距離を取る事を余儀なくされる。急ぎ過ぎかな。距離を詰めてもこうして距離をとられる。

普通のクナイよりは長く。小刀よりは短い私専用に打ってもらった武器を何本か取り出し、私はそれにチャクラの絃を巻きつけた。近接戦の方が手っ取り早いから持ち込んじゃうけど、これはお父さんだから出来る戦法だ。実際忍として戦場に出たら、近接戦は避けたい。

そうなると中距離。長距離の戦法をここで身に着けておいた方がいいね。そう思いつつ、私は両手の指先を器用に動かし、10本のクナイを手足のように操る。イメージは傀儡師。とはいっても、人形は使わないけどね。

私を確認しながら、お父さんは背に差していた太刀を一瞬で抜き

去ると同時に、今まで使っていた刀を腰に差す。どちらもチャクラ刀になるんだけど、まったく…。鍛冶屋だからって色々なもの趣味で作りすぎだつて。

その技術はちゃっかりといただいてる途中だから、私も人の事は言えないんだけどさ。

さてさて。お父さんの太刀と私のクナイ。チャクラをのせているっていつても、威力的には心許ない。そうなると下手な鉄砲数打ちや当たるんじゃない？作戦決行というわけで…。

ホルスターにいれていた小さな親指程度のクナイを掴むと、それを宙へと放り投げた。これら全てに私のチャクラを張り巡らせ済みほいほいつと次から次へと放り投げ放り投げ、360度私の周りは武器だらけになる。

白眼とは違うけど、ある意味これも絶対防御。名前はつけてないんだけど、どうしようかな。と考えてたらお父さんが太刀に火のチャクラを纏わせた。私は風なんだけど、今回は風じゃなくて水でいこうと印を組む。

しかし如何せん子供の身体。まだお父さんのチャクラに対抗出来るようなチャクラを練る事は出来ない。その辺りは子供だけど大人だった経験を活かして、水の球体を幾つも作ってお父さんに向かって放つ。

これで少しでも削れればいいけど。

「まだ甘いな！」

「知ってる」

太刀を振るうまでもなく蒸発。生半可な水じゃお父さんの作る火には負けてしまう。ふむふむ。この間よりも水にチャクラは練りこんだんだけど、やっぱり駄目かと観察する事も忘れない。

なら、やっぱり得意な風で攻めるのがいいかと、包囲網を作るために起点となるポイントにクナイを配置していく。

小さな小さなクナイ。クナイが乱舞する中で、何が止まって何が

動くで見破るのは難しい。けれど一応用心として、止めて動かしてを繰り返す。

ああ。乱舞をつけるのはいいかもしれない。剣乱舞だとありきたりだしそもそも剣じゃなくてクナイだ。どうするかなあ、なんて必殺技名を考えている私に向かって、お父さんの作り出した剣圧と火が——ここまでくると炎が私へと襲い掛かる。

私の水球とは対になるような火球。私の水じゃ相殺所か水が蒸発した蒸気が逆に私に対して視界を狭める事になるだろう。

ちらり、と視線を走らせ、クナイの配置を確認する。指先で繋がってるから目視は必要ないんだけど、如何せんまだ未熟。目視に頼らざるを得ないんだけど。まあ、要修行って事で勘弁してもらおう。所詮まだ五歳だ。

クナイに回転を与え、そこからも風を発生させる。

「風は火を煽るだけだぞー。俺の火炎急襲が避けれるかな？」

「……………」

そのまんま。ネーミングセンスがいまいち感じられないお父さん。気をつけないと、と心底思う。だって、今の私はその血が混ざってる。

「中途半端な風ならね。でも、真空状態を作り出せば、火は消える」
要は使い方だよ。そう言って笑えば、その通りだとお父さんも笑う。

木ノ葉は火の国と言われるだけあって火の属性が多い。それとは逆に風は少なめ。風は火の助けになる、って言ってたっけ。けれど火を助けるはずの風で、私は火を喰らう。

足止めをする為に宙に浮かせたクナイを絶え間なく放ち、更に印を組んで風の威力を高める。風を流すんじゃなくて、留める。真空状態を作り出さなきゃ、火は消えない。加減を調節するんだけど難しいと、私が更にチャクラを込めようとした瞬間、視線を感じて無意識にクナイをそれに向かっていつきに放ってしまう。

「あ……」

「あー……」

私とお父さんの声。

ここはお父さんの結界の中だから、許可がなきゃ入れないはずなんだけど……だから思わず攻撃しちゃったんだけどね。お母さんじゃなかったから。

けれどその姿を確認した瞬間、僅かに表情を崩して侵入者——もとい来客の様子を確認した。

流石上忍。無傷だ。

ちよつと悔しいな、なんて思ったのがばれだっただのか、私と同じ銀の色彩を持つ男がやれやれとばかりに肩を竦めた。

「お久しぶりです」

カカシさんイタチさん、と、名前は声に出さなくておく。ぺこりと軽く頭は下げただけどね。

「やあ、カカシ君イタチ君。また壊したのかい？ で、ハニーにいられてもらったのかな？ でも修行中にぶしつけな視線はいけないよー。俺の可愛い子供をそんな目で見たら武器打たないよ？」

「はっは。カシユウさん冗談でしょ。流石に俺にそういう趣味はありませんよ」

「……弟と同じ年か」

ちなみに、私は性別を間違われています。

色々と間違われています。お父さんが親馬鹿を發揮して、こんなに可愛いのに女の子の格好をしたら攫われる！なんて叫んで、否定しないでおいたらいつのまにかランセイ「男の子っていう認識になってた。」

将来的にはナルトの親友ってポジションにつきたいから、女の子なランセイより男の子なランセイの方が便利そうでいいんだけどね。
「……………」

さて。そろそろイタチは里抜けの時期かな、なんて思ったら上手く喋れなくて、私はもう一度だけ頭を下げて身を翻した。

「ホント、カシユウさんと似てないですね」

あまりの無口っぷりに、しみじみと呟くカカシの声が聞こえる。

あー。馬鹿だなあ。と私が呟くと同時に、ジリジリと燃える音。

「俺の気にしてる事を。カカシくん。覚悟はいいかなあ？」

「え？ 気にしてたんですか？？」

「カカシさん。有名な話ですよ」

あらら。イタチにまで言われてる。新客がお父さんにソレを言つて、たたき出された事件は有名だと思つてただけど…。可哀想にカカシは不在だったか。さっきまで私と修行してた所為か、お父さんの準備はオツケー。チャクラの練り方も相当気合が入った状態。対するカカシは壊れた武器を打ち直しにきた客人。

私のクナイ攻撃を完封した上忍だけど、あくまで客人だ。仕方ないと、私はホルスターから組み立て式の扇子を取り出すと、それを開いてチャクラを乗せた。

ふわり、と私から発せられる風によつて靡く髪。

「ちよつとカシユウさん！」

焦つたように叫ぶけど、その実動きは冷静そのもの。写輪眼のカカシは伊達じゃなし見てて勉強にはなるけど、流石に客人にそれはまずい。まあ、ここで怪我をしてもお父さんの所を利用するだろうけどね。

お父さん。鍛冶屋カシユウは木ノ葉でも腕利きとして名が売れているし、それに四代目であるミナトさんが利用していた鍛冶屋でもある。

それでカカシとお父さんも顔見知りで前々から顧客さんなんだけど。

「イタチさん。避けて下さい」

避けるだろうけど、一応声をかけておく。

「ああ」

私の方は見ずに、イタチが頷く。

印を組んで本格的な打ち合いに発展してきたお父さんとカカシに向かつて、私は風を纏わせた扇をブーメランの要領で投げた。ついでに追尾型にしておく。

「ッ！？」

2人して同時に息を呑む音が聞こえたけど、あえて淡々と声をかける。

「お父さん。カカシさんはお客さんだよ。ちゃんと対応して。カカシさん。適当に避けてお父さんに対処させて下さい。イタチさん。お茶でも準備します」

着いて来て下さいと言えば、イタチに断る理由はない。

「ランセイー」

その男がいいのか？ イタチがいいのか！？ なんて涙ながらに叫ぶお父さんはスルー。

「巻き込まれ。俺にお茶は！？」

と叫ぶカカシもスルー。

そういえば美味しい茶葉と茶請けがあったよな。

「イタチさん。美味しい茶菓子があります」

「そうか」

「甘い的大丈夫でしたよね？」

「ああ」

しかし、イタチはいいお兄ちゃんだ。話してみると本当に思う。

こんな兄ちゃんだからこそ、サスケはから回って回ってあんな事をやったんだろうけど。

考え込む私の頭の上にぼむっと手の平を置いて、ゆっくりと撫でるイタチ。実は子供好きだよなえ。

「俺の弟も同じ年だが、ランはしっかりとしているな」

「サスケ君でしたっけ」

「ああ」

「同じ年の友人がいないのでよくわかりませんが……イタチさんの

弟なら相当出来るんじゃない？」

「ランよりは劣る」

「（腕が…だよな。まあ、私は規格外だし。）俺は、父からあんな修行を受けてますし」

中身大人だし。

「今度会ってくれ」

「別にいいですけど」

「ランとなら、良い友達になれると思う」

「……………」

あれ？

ここでサスケと？

別に断る理由も無いから頷くと、イタチは唇の端を上げて満足そうに笑みを浮かべてた。

お弁当を持って会いに行こう

お母さんに協力してもらったのお弁当作り。おむすび4つ。たこさんウィンナーにアスパラのベーコン巻き。たまご焼きにからあげミニトマト。

豪勢な感じのお弁当をリュックにいれて、私は小さな手足を動かして歩き出す。首元まですっぽりと隠れる蒼と白と黒の服。勿論長袖長ズボン。銀色の長い髪は後ろで無造作に一つに縛っているけど、それを縛ってるゴムと特殊仕様。

「ふぁ。いい天気」

空を仰げば晴天。

ちなみに、お弁当は持つてるけどピクニックじゃない。今日はナルトの所に行こうかと思って気合をいれてみたのだ。

天華は私の左肩にとまってキョロキョロと辺りを見回してた。お父さんから私に近付く害虫を退治してくれ、なんて言われてたけど…。

「テン。お父さんの言う事は真に受けなくていいからね」
《む？》

「害虫駆除って…害虫はいないからね。それに俺でも対処出来るし」
《むう。そうなのか？》

「そうなのですよ。どれだけ親馬鹿って話しになるから」
《……そうなのか》

真面目な口調の天華に、思わず苦笑を漏らしながら歩いてく。赤ん坊の頃からずっとこうして2人でいるから、天華といるのは当たり前だし息をするのと同じぐらい自然な事になってる。

だから、初めての事でも天華と一緒になら不安もない。

「こつちだっけ？」

漫画の中でナルトの家を見た事はあるけど、実際里を歩くとよくわからないんだよね。

《ふむ。どうやら家にはおらぬようだ》

「何処かわかる？」

《こちらだ》

「へえ……」

道を逸れて、少し山の方に行くみたい。修行なのかな。そんな軽い気持ちで山の方へと進路を変えて……歩きにくい。

仕方ないから枝に飛び移って、枝から枝へと移動する。

あれ？ 結構山奥。

本当に山奥。

ドンドンと奥に進む事に不安を覚えて天華を見ているけど、どうやらもつと奥みたい。

「スピードあげるよ」

距離がありそうだと、私はチャクラを纏わせスピードをあげた。瞬身、といってもいいと思うんだけど、それだとちょっとスピードが遅いかな。

まだまだだなあ、なんて呟く私に、天華が突然肩から飛び立つ。

おや？

《ラン》

「ん？」

一回枝を蹴り、くるりと回って勢いを殺した後、蹴った枝へと着地する。気配を消しながら辺りを伺うと、気配を垂れ流した人間が一人二人三人四人……結構多いな。

「何だ？」

幹に身体を隠すようにして様子を伺えば、忙しく動く影。

「……」

怪訝そうな表情を浮かべながらも更に様子を伺う。何かがおかしい。

《ラン。ナルトだ》

「は？」

思わず間抜けな声を漏らしたけど、見えるのは大人だけ。けれど目を凝らしてみれば、ちらちらと金色が視界を掠めた。一瞬呆けたらしい。自分の中では在りえないと思っただけに、状況把握に数秒要した。

忍の世界を生きる予定の身としては、この数秒は命取り。だけど、それぐらい私の目には信じられない光景が飛び込んできている。

忙しなく動く大人たち。見慣れない動きだと思ったけど、その感想は当たり前。さつきから私よりも小さい子供を囲んで蹴る為に足を動かしているのだ。

「——ッ。何だあれ。何をやってるんだ、子供に！」

あれがいい年した大人のする事かッ！？

口々に、キツネが、とか。人殺し、とか。死ぬ、とか。とても子供に聞かせられる内容じゃない事を叫びながら、動かない子供に暴行を続ける。

「テン。変化だ」

《うむ。それと転写の術だろう？》

「うん」

印を組み、暗部の忍姿になる。面は今の天華をイメージして鳥の面。

準備を終えた私は、更に印を組み風を巻き起こした。

「なっ、なんだあ？」

「このキツネがなにかしたんじゃない？」

「化け物がつっ！！」

明らかに別の場所から吹いた風なのに、何故か口々にナルトの所為だと叫ぶ男たち。

一人の男が恐怖に顔を引き攣らせたまま、右足を持ち上げ勢いよ

く小さな身体を蹴り上げようとした。馬鹿じゃないだろうか。私がいるのに、そんな事させるわけがないだろうと遠慮なく針を投げつけた。

脅しなんかじゃない。勿論、貫通させる為だ。

男の足を貫通してもまだ余裕がある長針。

突如身に起こった痛みにも、男は足を押さえつけ転げまわる。

「うあああああああ」

「なんだ！ 何が起こった！？」

毒を塗ってないだけ有り難いと思ってしまう思考回路には一時蓋をしながら、こういう集団をパニックに落とすのは容易いなあ、なんて冷静に考える。

けれど更に追い討ちをかけるように、転写の術を発動させた。デジカメの術バージョンって所かな。紙に景色を写しこむんだけど、今写したのは勿論暴行現場だ。

それを空から放り投げ、なんて可愛い事はしない。紙にチャクラを練りこみ、男たちの顔に叩き付けた。

「ぶあつ」

「ぐっ」

ただの紙。しかしチャクラを練りこめば立派な凶器だ。

顔に叩き付けた時に頬や額を切ったみたいだけど、気にならない。この現場を見て、この程度の事で罪悪感は芽生えない。

しかし、ここまできて漸く第三者の存在を思いついたのか、呻き声をあげながら辺りを見回す男たちに、私は感情を読ませない淡々とした音を降らせた。

「里の禁を破った愚か者」

「ッ！！」

顔を押さえつけ、ナルトに対して暴行をしていた男を腕で払いの

け、鳥の面を見せる。

これ見よがしに見せた暗部の鳥面だったけど、どうやらちゃんと誤解してくれたらしい。その証拠に、私の全身を捉えた途端に歪んだ顔を真つ青なものへと変えた。

「なつ。人殺しを庇うのか!？」

「コイツはキツネだろう!!」

けれど、次の瞬間には震えながらも私に対していかにも自分たちが正しいと、そう主張しだす男たちに、面の奥でクク、と笑いを漏らす。

目に冷たい色が宿るが、それも仕方ないだろう。久々に腹がたった。

「封印という役目を負っただけの赤子に罪があると、そういうか？ならば、お前の腹に封印してやろうか？それとも、お前の孫が いいか？」

口調はあくまでも淡々と、怒りを押し秘めた。

「な…なにを言ってる…」

「自分たちが正しいと思うならば、火影様にも同じ事を言うんだな。これと、お前たちが何を言ったのか。今の事は全て報告させてもらった」

男たちの顔色が今までにない程かわる。

先ほど叩き付けた紙には男たちの暴行現場というこれ以上ない程の証拠。

嘘だとは思わなかった男たちは、ヒイイと情けない声をあげながら、一目散に逃げ出す。足を長針で貫いた男も痛みを感じないのか逃げただけだ…。

「針回収」

チャクラの絛をつけといて良かった。

針を抜く時に手に伝わった感触に顔を顰めながら、針を使用済み

の場所へと移動する。家に帰ったら熱湯消毒をしよう。思いの他人を傷つけたのに罪悪感がないなあ、と思ったんだけど、やはりこの現場を見たら仕方ない。

変化の術をといて、私は蹲ってるナルトに駆け寄った。治療道具を持ち歩いて良かった。竹筒に入ってた水でてぬぐいを濡らし、ナルトの顔を拭こうと腕を伸ばしたけど、瞬間背筋に寒気を感じてその場から距離を取ってしまう。

何だ？

今の寒気は。

首を傾げながらナルトを見る。

まさか…。

まさか……？

《ラン。油断するな。こやつは…》

私の疑惑を肯定するように、天華が羽ばたき、私の肩に止まる。

「……俺は、夜月ランセイ。その物騒なチャクラを収めてくれないか？」

天華の警戒は収まらない。それは、目の前のナルトに注がれている。

けれど、私は天華とは別の意味合いを視線に込め、真っ直ぐにナルトを見つめながら自己紹介。

「……」

私の声に、ナルトは答えない。無言のままだ。

「うずまきナルト。強いんだな。知らなかった」

無反応だったけど、そんなナルトに思わず本音が漏れた。

これは本当に予想外だった。

暴行も予想外だったけど、ナルトが強いつていうのも予想外。

「へえ…驚かないんだ？」

むくり、と起き上がったナルトは目を細めて俺を見る。

十分驚いてるんだけど、そう見えないかな。どうやら傍目から見ると、私の表情はまったく変わらならしい。変化も解いてるんだけど、年の功だろうかとちよつと本気で考えてしまう。

しかし、さっきまで受けてた暴行の痕は一切なかった。九尾の力もあるだろうけど、なんとなくそれを意図して使つてると印象を受ける。

ふむ。どうやらこの辺りの道筋は漫画からは外れてるらしい。

となると策を弄する事は止めておこう。

呆れるぐらい真っ直ぐにいこうと腹を決め、私は改めてナルトを見つめた。

緊張のためか、無意識に呼吸が早くなる。

「ちよつと驚いた。けど…さ。俺がお前と友達になりに来たつて言つたら…信じるか？」

「……」

真正面からいつてみた。

いや。うん。どうしよう。腹は決めたはずなのに、その何言つてんだコイツ？なんて沈黙がものすごく辛いんだけど。

しょうがないからリュックから弁当を広げて、ナルトの分も用意してみた。ある意味気まずすぎたの現実逃避も含まれているんだろ
うなあ、と思うけど、更にナルトの呆れたような視線が突き刺さつて、肩を竦めることしか出来ない。

「これ、一緒に食べようと思って。っつーわけで、気が向いたら食

って」

気まずさを誤魔化すように、ぱくぱくとからあげや卵焼きを口へと放り投げる。うん、美味しい。

「アンタさ……俺が食べると思ってたの？」

呆れた声に呆れた顔のナルト。原作通りだったら食べると思ってたよ。

「ううん。警戒されてるから難しいかなあって思ってる。まあ、無理やり友達になっても仕方ないし、無理なら諦める」

ちなみに、これは私の本音だったりする。

私の肩にとまっている天華が物言いたげにナルトを見てたわけだけど。

「その肩の鳥は？」

「友達になつてくれたら教える」

一歩分近付いてきたナルトの言葉を一刀両断してみる。私の事なら答えるけど、天華の事になるとすぐに答えたくは無い。

話す気ではいるけどね。

「……俺と友達になりたいんだよね？」

私が答えなかった事が意外だったのか、声音が怪訝そうなものへと変わる。

「友達つてのは対等な関係だよな？ 一方的つてのはありえない」ナルトの変化には突っ込まず、お弁当をぱくぱく。うん。おむすびも美味い。

「……お前、友達いないだろ？」

というか、呆れ、怪訝ときた次の言葉がそれ？

「いないけど困ってない。っつーか、五歳児の会話じゃないな」

五歳児が顔をつき合わせて友達いないだろってどんな会話だ？

そう思ってたんだけど、ナルトにとってみたら私の年齢の方が意外だったらしい。

「俺と同じ年？」

同じ年に驚いたのか、ナルトの表情が崩れた。

「俺の方が五ヶ月程早い。で、お茶」

怪我は治っても血の味はするだろうと、私は駄目もとでお茶を差し出す。私とお茶を交互に見てたナルトだけど、何の心境の変化か受け取り、それをいつきに飲み干した。

「美味い」

「だろ。ほら、おにぎりも美味いよ」

お茶を飲んでくれたのをいい事に、ここぞとばかりにおにぎりとおかずを盛り付けた皿を差し出す。

「ふうん」

恐る恐ると差し出した私の手から皿を受け取り、ぱくぱくと食べ出すナルト。おお。なんかいい雰囲気。

にへら、と笑った私をナルトが呆れた目で見てたんだけど、友達への第一歩を歩め出したような気がする今の私は、それすらも嬉しくなっただけで笑みを浮かべてしまう。

まあ…スレナルだったのは予想外過ぎたけどね…。

欠食児童は栄養をとれ

只今、ナルトと向かい合わせでお弁当を食べております。

なんていうか、イメージがまったく違うけど、こんな感じもいいのかもなあ、と精神年齢だけは結構いつてしまっている私は思ったりとかね。

精神年齢があがると、少しの事じゃ動じないし立ち直りも早いんだよね。

さっきから天華とナルトの視線の応酬が凄かったりもするんだけど、間に挟まれた私はいえは気にせずにお弁当をパクパクと食べているとも！

お腹もすいたしね。術を使うとやっぱりお腹がすくのよ。まあ、たいた術は使つてないけど。

「……………」

《…………》

ある程度視線の応酬が終わったのか、今度は天華とナルトがジッと私の方を見てくるけど、あえてスルーで。ものすごく物言いたげな眼差しだけど、やっぱりスルーで。

「とりあえず食え」

ナルトの実力が高いのはわかる。正直言つて今の私と同等かそれ以上。通行人Aの私にしては相当頑張つて下忍以上の実力は得てい

と思うんだけど、その辺りはいまいち自信がない。

というわけで、多分私以上だとは思うんだけどね。

そう。それはいい。だがしかしその細さは何だ！？ これでも生前は結構いい年をした未婚な女。やんちゃだったけど。男前だったけど。姉御や姐さんよりもアニキと呼びたいなんて下僕候補——それは謹んで辞退した——も居たりなんかしちゃったけど！ 裏の顔は料理好きな動物好き。可愛い物も好きの割りに表の顔はシンプルに。

やせ細った子供と動物は肥えさせなければ許せんという、ある意味魂にしっかりと刻み込まれ、現在の私の人格形成の礎となっている根底にあるものを、今発揮せずにいつ発揮する。

「食いながら話せ。俺も答える。テン」

私に名前を呼ばれた瞬間、わかりやすく天華の身体がビクウと揺れる。食事に関して例外はないのだ。天華用の皿に盛り付け、肩にのっている天華をその前へと置く。食べ。食ってしまえと言わんばかりの無言の圧力。

反論する事を諦めたのか、天華はチラリ、とナルトに諦めると言わんばかりの眼差しを向けた後、大人しく食べ始めた。

「変わったヤツ…だな。食うよ。食うから睨むな」

止めていた口と手を動かし始めたナルトに私は満足気に頷くと、最後のおにぎりを口の中へと放り込む。後はナルトと天華の分。

食後のお茶とデザートに移った私とお弁当を交互に見比べた後、ナルトは何も言わずに無言のままでお弁当を食べ続けた。

欠食児童に量が多かったかな。始めはお粥の方がいいだろうか。ちよつと悩むなあ、と私はチラリ、ではなく真正面からナルトを見据えると。

「食べれる量でいい。胃が吃驚したら大変だ」

次は粥だな、と言葉を付け足す私に、最早ナルトには返す言葉がないらしい。変な奴変な奴と呪文のように繰り返すだけ。

失礼な。

中身がこんなだからちよつと変わつてゐる自覚はあるけど、でもそれ程オカシイ言動はしてない。何故ならば、そこまで話さないようにしてるからね。

デザートは桜餅を頬張りながら、ほうじ茶を喉の奥へと流し込む。うん。美味。今度は洋菓子がいいかなあ、しかし自分が作つても不自然じゃない年齢まで我慢すべきか。いやそれだと時間が掛かりすぎる。

ならばお母さんと挑戦するしかないだろうと、すっかりデザートで占められている私の耳に、ナルトのわざとらしい咳払いが届いた。

あ……。忘れてた。

「食つたつてばよ」

「口調」

「……出たり出なかつたり。表だとてばよ、つて話すから割と癖になつてゐる。で、ちゃんと自己紹介してくれんだろ？」

下から睨みつけるようにしてくるナルト。瞳の色は同じ青色。そんな事を思いながら、私は一回だけ頷く。

「勿論。俺は夜月ランセイ。相棒は天華。お前の腹の中の対の存在だ。となると俺はさしずめ裏人柱力という所か」

天華は影獣と呼ばれる存在で、尾獣以上に闇に葬り去られた存在なんだつて。十尾が九つに分かれる時に生まれた存在だとかいうけど、その辺りは不明。

私の一族に伝わりつつ、ひっそりと暮らしたとか。

「……裏人柱力？」

「ああ。天華は銀毛白面九尾の狐だ。これは内密にな。俺の一族に伝わる……多分四代目しか知らない事実だ」

私の言葉に、ナルトは息を飲み込んだ。

これは両親からじゃなくて天華から聞いた話だけど、四代目に保護されたとか。まあ、実際は四代目になる前みたいだけだね。

その辺りの経緯はまだ詳しく聞いていないけど、きっと録でもない事があったんだろうなとは予想がつく。

だから両親も天華も、詳しく話さないんだろうと思うしね。まだ、だけど。

「だから、对だ。まあ、对だから友達になりたいわけじゃない。その辺りの判断はナルトに任せる」

はつきり言っただけの傷の舐めあいなんかじゃない。

私は天華という事で傷なんて負った事がない。

ナルトに対して申し訳ない気持ちもないわけじゃないけど、元々それがなくても友達になりたいと思ってたし。

けれど淡々と喋る私を怪訝に思ったのか、ナルトの整った顔が突如目の前に沸いた。沸いた？ うん。沸いたで問題なし。

「ふうん。邪魔になりそうなら遠慮なく切り捨てるけど——いいよ。友達になつてやるってばよ？」

にかつと、表のナルトの笑みを浮かべるんだけど。

「うわ。その笑顔引くな」

どうにも裏の、本当の顔で今まで話していた所為か、原作らしいナルトの笑みに拒絶反応がつ。あのニヤリ、な口元の端だけを上げるアルカイクスマイルから一転、にこやかな人懐っこい笑みを浮かべられてもねえ…。

鳥肌のたつた腕を撫でていたら、ナルトが微かにだけ眉間に皺を寄せた。

「アンタ…相当失礼だな。無邪気な子供らしい微笑だろうが」

「それを言う時点でアウト」

「セーフだ」

「アウト」

「寧ろ全然いけるだろ！」

「寧ろまったくいけずに拒絶反応が起こる」

「なッ！」

「俺の前じゃ素で居ろ。でないと気色悪い」

漫画じゃあの笑顔に救われてただけだねー。裏の顔が素でそれを見た後だと違和感しかないナルトの無理をし^{カオ}てる表の表情。

「ツ~~~~!!」

無言というよりも吐き出す言葉がなく、握り拳を作つて地団駄踏むナルトは、年相応に見えてちよつと可愛い。

「食べれるなら、デザート」

「マイペースな奴だな！俺以上にマイペースな奴、初めて見たぜまったく!!!」

そして食えばいいんだろ。食えば!!と叫んで桜餅を掴み、八つ当たりをするかのようにガツガツと食べまくる。

うん。胃薬を用意しよう。

多分胃もたれが起こりそうなナルトの食べ方に、私はお茶を用意しながらそんな事を思っていた。

その予感間違いじゃなく、後日粥と胃薬の差し入れをしたわけだけど…。

「……いや、美味しいよ。美味いんだけど量が多いだろ？」

とぼやくナルトに、私は慣れる、の一言だけを残して厨房へと消えていく。さてさて。始めに冷蔵庫と厨房を整えなきゃな。

やる事は沢山ありそうだと、私は腕まくりをしながら今後の予定について頭をフル回転させてたりとか。

まあ、ナルトが後の方で戦々恐々と私を見てたのはご愛嬌だろう。うん。

フラグは回収される為にあるらしい

カンカンッ、と金属を叩く音が部屋中に響き渡るが、私にとっては既に慣れ親しんだ音。今更とばかりに気にせず、自分の手の平に入ったサイズのクナイを作っていく。いつそのこと金型でも作ろうか。火力は火遁で何とかするとして、肝心の鋳物は――父さんかな。父さんに頼めば何とかなりそうな気がする。

小さい頃からいつてもまだ十分小さいけど、父さんにくつついて回って技術を盗みまくっているこの私。しかも両親が手先が器用なおかげか、その血をひいている私も手先が器用という特典があつてすごく便利。

前の時も不器用じゃなかったけど、ここまで器用に指先が動くかといえは怪しい。そんなわけで、私は豊富にある資材を好き勝手使つてたりした。まあ、切れ端を繋ぎ合わせてとか、溶かして打ち直して、といった節約方式だけど。

まだまだまだ半人前以下の私が、大きな塊を使うわけにもいかないしね。

しかし金型かあ。そうなると木型の作成が無難だよね。

型を上手く作れるかわからないけど、とりあえず作ってみよう。量産体制をとつておいても損はないし。絃で操るなら尚更、一つ一つを入魂したクナイを使う必要はないし。切れ味さえ損なわれていなければ。

ナルトも器用そうだから誘ってみよっかなあ。そうだ、母さんに聞いてみないと。友達が出来たから、今度ここに連れてきていいって。

そう思うと初だよね。初友達。

良い響きだなあ、なんて微妙にテンションが上ってきたんだけど、扉を叩く音が聞こえて急に現実に引き戻された。

集中してたのに。愚痴っても仕方ないけど、思わずそんな言葉を漏らしながら、私は来客を迎える為に扉まで歩いていく。

これが父さんだったら、ノックなんかしない。

家族用の通路から入って私の様子を見たり、依頼をこなしたりするから。母さんも同じだね。

「誰？」

そり、と子猫一匹分の隙間を開けて問いかけてみる。

黒い壁が出来て外の光が遮断される。身長は私より高いけど、大人の身長じゃない。視線を徐々に上へと移動していくと、そこにいたのはイタチ。

「イタチさん？」

声に出す時はさん付けで。

それを確実に守っている私は、不思議そうにイタチを見上げながら首を傾げた。任務はどうしたんだろうとか。この間依頼された品はまだ完成してないんじゃないかな、とか疑問が浮かぶ。

「暇なら、俺の弟に会わないか？」

口の端を上げるだけの笑み。

微妙に目元も笑ってるけど、ちょっとわかりにくいイタチの微笑。それ、絶対誤解されるよ？

ああ。だからうちはの人と何となく微妙になる場面が漫画で書かれていたのか。それとも二重スパイだから態と気まづくさせたのか。イタチ自身は気にしなさそうな人間関係の綻び。

「サスケ君と、今日、ですか？」

確かに、数日前に今度、という話しをしたのは記憶に新しすぎる。ここでまさかのサスケフラグか！？と思ったから尚更だ。

でも、まさか今日イタチから声がかかるとは思わなかったと思えば、どうやらそれが表に出ていたらしい。

「奇襲をかけないと、ランは逃げそうだからな」

「…奇襲……流石に、逃げないよ」

別にいいって言ったのは私だし。

「そうか」

そう言ってまた私の頭を撫でるイタチ。丁度いい位置に私の頭があるからか。それとも撫でやすそうな髪質をしているからなのか。うん。母さんに似た私の髪質はサラサラですよ。イタチやサスケは硬そうだけどね。見た目。だから撫でたくなる気持ちは解らなくはないけどね。

私だってテンちゃんを撫でまくるし。ふわふわーのもふもふーな感触が病みつきになってるし。ひよっとしたらイタチにとって私の頭はそうなんだろうかと半ば本気で悩みながら、

「待ってて下さい。片付けます」

会う覚悟を決めたであろう私の言葉に、イタチは満足そうに頷く。なんだろう。このフレンドリーな感じ。サスケに対してはクール系な兄ちゃん。実際は家族愛というより弟愛が凄まじい人だったんだけど、最期まで表に出すようなタイプじゃなかった。それなのに、この年下を猫かわいがりしているような撫で方や、弧を描く目元はなんでしょか。

流石に片付けは私しか分からないから手伝わなかったけど、イタチは準備を終えた私の頭をもう一回撫でた。

…結局撫でただけか。

とりあえず気にしたら何かが負けると、私は母さんに声を掛けてからイタチの横に並ぶように歩いた。

コンパスの違いで、どうしても私が遅れるんだけどね。けれどイタチは私に合わせてくれる。瞬身を使ってもいいけど、それでもやっぱりイタチよりは遅い。

あああああ。中途半端！

もっとバビュンとかっこよく出来ないのかな。

ひよっとしたら私は通行人Aじゃなくて、CやDの微妙な立ち位置なのかもしれない。となるとバビュンと颯爽と移動する事には限

度があるかと、折角NARUTOの世界に来たのにと密かにガツクリと肩を落とした。

しかし、いつまでもへこんでいた所で通行人DがCに昇格するわけがない。さつさと立ち直ってみたけど、会話がな

この沈黙の突破口は何処だ？

二十何年間生きていた話術をここで発揮させるよと？

いや、無理無理。イタチに何を話せば話しが弾むのかがわからない。

先ほどから私の頭の中だけで行われている脳内会議。終盤に差し掛かってみた所で解決策は生まれてこない。はっはっは。ここは無意味に笑っておこう。笑顔は最強だ。穏やかな笑顔を浮かべて場を和ませておけば全てが上手くいくはずだ！

思考回路が変な方向にいつているような気もするが、あまりに気まずすぎて軌道修正する余裕もない。

多少。いや、かなりぎこちなく手足を動かしてイタチの横を歩いていたら、イタチが私の方をちらりと見た後、視線を木々の方へと移す。

……。

そこまで今の私は危険人物だっただろうか。

この子供らしい可愛らしい笑顔。自分で言っている時点で色々と終わっているような気もするけど、そんな可愛らしい笑顔は目を逸らす程？

何？

歩き出してそれ程の時間が経っているわけでもないのに、このへこみ時間は。時間と精神疲労が明らかにあっていないがどうだろう。私の気のせいなのか。

思わず天華に助けを求めようとしたけど、天華は危険を察知してか私の肩から飛び立ってしまう。

……………。

そうだね。

天華もこの状況どうしようかと聞かれた所で困るよね。相手はイチだし。なんだろうなあ……この会話能力のない三人。

たそがれている私とは対照的に、イチチはあくまでもマイペース。表情を崩す気配すらない。

私の方が嬉しくないけど中身は大人なのに、と言ってみた所で、状況は何一つ変わらなかった。

ぼてぼてぼて。

忍らしくない足音が響く。

勿論犯人は私だったりする。足音をさせないで歩けるけど、子供らしくという事を前面に押し出して足音をたててみる。

しかし、私の家は里の外れ。うちは一族の居住区からは結構離れていてね。つまり疲れたんだよね。

距離あるし。コンパス短いし。沢山手足を動かせばどうしてもかたまるくなってくる。そういえば俺に籠って少し睡眠時間を削っていたつけ。ご飯は両親と一緒に食べるから、三食はきっちりだけどもあ、そんな感じで今日は早めにバテ気味なんだと思うんだけどね！。

「大丈夫か？」

私の表情に疲れが出ていたのか、イチチが足を止めて私の顔を覗き込むように問いかけてきてくれた。

「大丈夫」

疲れたけど歩けない程じゃないし。

けれど先が見えないっていうのは体力的にキツイから、後どれくらいかだけは聞いておこう。そうすれば多少なりとも楽になると思うしね。

「イチチさん。後、どれくらい？」

歩けば着くのかな？

「もうじき……後5分程か？」

曖昧に答えようとしたイタチに、はつきり答えてほしいなあ、という視線を向けてしまう。この疲労で曖昧な答えは堪えるんだよね。けれど語尾にハテナマークをつけられても私もわからないと肩を竦めてみる。

「俺に聞かれても」

「それもそうだな」

ここでイタチの天然疑惑を持ち上げてもいいだろうか？

それもそうだなと真顔で答えたイタチに、私はそんな疑惑の眼差しを向ける。こうしてみると、幾ら大人びているといってもまだ子供だ。

イタチの子供らしい一面を見れてホッとしていたら、まだ離れているけどうちはマークが見えた気がした。

ああ、あの一角がうちはの居住スペースなんだ。広いなあ。流石木の葉の名門うちは一族。

「ここがうちの居住区域だ」

「そうみたいです」

大丈夫だよ。この距離だと色々と見えてるし、皆うちはの家紋入りの服着てるし。しかし自己主張の激しい一族だなあ。これ見よがしな家紋って。

日向ってどうだったっけ。今度観察に行こうかな。父さんは取引があるし納品にも行くから、それについていけば問題なく観察出来るだろうし。

思考が一瞬今度の日向一族観察に向きかけたけど、イタチの頭ぼん＋撫で撫でに強制的に現実引き戻される。

「この中に入らなきゃ駄目ですか？」

しかし空気が良くない。子供に向けてなんだこのよそ者は？と言わんばかりの視線を向ける、大人気ない奴等はなんだ。

写輪眼がそんなに偉いのか。木の葉最強は今の所日向の看板だぞ。うちの瞳術を極めちゃえばどっちが最強か分からないんだけどね。感じる不躰な視線に、思わず私が本音を漏らしながらイタチを見上げれば。

「問題ない」

迷いのない返事が返ってきた。

いや、まあ木の葉の一員だしね。問題はないと思うんだよ。思うんだけど何となくイヤって言うかね。

「ラン。行くぞ」

渋る私の手を取り、イタチはどんどん突き進んでいく。

なんだろうね。このお兄ちゃんと手を繋いで楽しい散歩的な構図は。

楽しくはないんだけど、見た目的にはひょっとしたら微笑ましいのかも。私が微妙に現実から目を逸らしている隙に、イタチは私の手が痛まないように引っ張りながらも目的地まで強制的に連れて行く。

ああ、うん。気にせず我が道に行く所はホント原作サスケの兄って感じだよな。

サスケからの敵認定

ズルズルと引き摺られるように歩いていた、まだ体重の軽い子供な私と、迷いのないイタチ。

そう。それもさつきまでの話し。

今は何故か大きめのテーブルを挟んで、イタチとサスケ兄弟とお茶を飲んだりしてたりとかね。しかし、人数が増えた割りに相変わらずな沈黙。

寧ろ、サスケからの探るような——なんて可愛いものじゃなく、ギンツと睨みつけられる視線は居心地が悪い。

そういえば君、イタチに修行とかつけてもらいたがってたっけか。弟の自分が次回に回されたのに、見ず知らずの自分よりも小さな子供を連れてくれば機嫌も悪くなるよね。それが、弟の遊び相手確保だとしても。

まあ、正直私には関係ないし同じ年だし。

お茶請けが美味しいのがまだ救いだと、私は目の前の風景にフィルターを掛けてお茶とお菓子を楽しむ。

今度抹茶でも点ててもらおうかなあ。久しぶりに飲みたいなあ。

ちなみに、私とサスケの邂逅は今から30分程前だった。

イタチの帰還に喜びを隠さないまま家から飛び出してきたサスケは、引き摺られるように歩く私を見て驚愕に目を見開く。

ああ、うん。吃驚するよね。自慢の兄ちゃんが子供を引き摺って歩いてたら。

それは私も同感だよと思ってたんだけど、その後のサスケの行動は正直予想外だった。いや、ある意味予想内なのかな？ どっちだ??

兎に角、サスケは私を遠慮なく睨みつけながら、声だけでイタチに問う。

「そいつ、誰だよ？」

そんな刺々しいサスケに慣れているのか、イタチは私に自己紹介しろと言わんばかりの視線を向けてきた。

いやいや。聞かれてるのアナタでしょ。

けれど私が口を開かないと話が進まないと、気が重いなあ、なんて思いながらサスケに顔を向けた。

「夜月ランセイ」

とりあえず自己紹介。

本当にシンプルな、名前しか言わない自己紹介だけどイタチからの突っ込みはない。これでいいのだろうか、自分でそれしか言わなかった割にイタチを見上げれば…。

ああ、良いんだね。

イタチの表情でこれでいいんだと納得する。

「お前に聞いてない」

しかしツンツンなサスケは、私が答えた事に不満なのか、殺気と呼ぶには可愛らしいものを向けてくる。

しかしさっきから会話が成り立たないな。

というかやつぱりただの兄ちゃん大好きっ子か。

お家に帰りたいなあ…。

そう私が思った時点で、イタチが茶を煎れよう、なんて言いながら台所に行ってしまう。容赦なく私に背を向け、場の空気なんてまったくといっていい程考慮もせずに。

少しは空気を読めと叫びたい。

つつーか、サスケもイタチにくつついて台所に行けばいいのにと、心底思っていたんだけどサスケは動かない。頼むから動いてほしい。正直、空気が重たいのよ。

「……」

私を探るようにジッと見てくるサスケ。

だから殺気を混ぜるな、と思わずため息が漏れた。

中身が大人だろうとなんだらうと、気まずいものは気まずい！

そんなわけで、結構重たいため息になったけど、ギンツと更にサスケに睨まれる。

仕方ない。事情説明と、後はサスケが嫌なら断ってほしいと伝えてみよう。

「俺と同じ年の弟がいると聞いた。手合わせをしてほしいと。アンタが嫌ならイタチさんに断ってくれ」

面倒だと言わんばかりの態度と口調。

多少大人気ないかもしれないけど仕方ない。

「……お前が俺の相手になるのかよ」

ああ。そっちの心配か。

「さあな」

肩を竦めながら答えてみたけど、心境としては通行人Dに聞くなといった所。私のそんな態度が余裕綽々に見えたのか、サスケの唇の端がクイツと上がった。

ん？ 何だその表情。

「イタチ。コイツをへこましたら俺と手合わせしろよ？」

おや？ いつの間にか戻ってきたイタチに、サスケがフン、と自信あり気に胸を張りながら何か言ってる。

ちらり、とイタチに視線をながして見れば、イタチも口元の端を上げるだけの笑み。

兄弟は似るもんだしコミュニケーションをとるのも大いに結構。

だがしかし、部外者を置き去りにするのは止めてもらえないだろうか。

「ランに一撃でも与えられたらな」

あれ？

いつの間にかサスケと私が手合わせする事決定な感じ。別にいいんだけどね。サスケが相手なら、今の自分の立ち位置も分かりやすいし。

ナルト相手だと、正直上忍レベルに差し迫って年相応からかけ離れてるから、基準にならないんだよね。

幾らサスケが一線を賀してるとは言っても、基準に出来ない程じゃない。

「ラン。手加減するなよ？」

「……イタチさん。面倒な事押し付けないで下さい」

恐らくだけどね、あのサスケから一撃ももらわずに倒せという事なんだろうなあ。流石に買いかぶり過ぎなんだけどと目を細めてイタチを見れば、相変わらず何を考えてるか分からない笑みが返ってきた。

「まあ…その為に呼ばれたんで、手合わせはしますよ」

なんとなく、自分が里抜けをする前に遊び相手を確保しようっていう印象を受けるんだけど、私の考えすぎなのかどうなのか。

「ああ。その前に茶の準備が出来た」

「…………イタチさんってマイペースですよね」

このまま手合わせかと思ったら、お茶ですか。

いや、飲みたいよ？ 飲みたいけど、今の流れはお茶じゃないだろうと思うのは私の気のせいかな。

そんなわけで冒頭に続くわけだけど…。

「逃げるなよ」

既に私がお茶を飲みながら寛ぎモードに入っている事に気付いて
るのか。それとも面倒だと思っっている態度が表に出てるのか。サス
ケが態々と念押ししてくる。君はそんなにイタチと手合わせをした
いのか。

「逃げた所で無駄、だろ」

どうせイタチに捕まるし。

「余裕だな」

というか、隣で無責任に煽らないでくれないかな。

「チツ。舐めやがって」

いやいやいや。私が言ったんじゃないから。

一体この兄弟は私を何だと思ってるのだろうか。君たちみたいに
主役級にはなれない通行人なんだけど。

しかもAからDに格下げになったばかりの私に対して余裕だのな
んだのと。イタチとサスケの目は節穴か。

最近多くなった脳内でのやりとり。気が付けば、イタチとサスケ
の両方から穴の開くような視線を向けられていた。

「ラン。茶菓子はどうだ？ お前の勧めてくれた場所の菓子だ」

って…そんな真面目な表情して茶菓子か。

いや、イタチらしいけど。なんかすごくイタチらしいけど。

「美味しいですよ。新作です」

皿に置かれた菓子を改めて見てみれば、色とりどりの菓子。私
が見た事ないから多分新作だよ。

「そうか」

「チツ」

……。

ライ。その兄弟二人。私に対して温度差激し過ぎないか？

敵は敵でも好敵手？

お茶も菓子も美味しかった。

まさかイタチが煎れたのかなあ。でも、家までお邪魔した割りにご両親に会ってないよね。このお茶は姿を見ていない母親が煎れたのか。それともイタチが煎れたのか。どっちかなあ…。

「さつさと構えろ！」

現実逃避をしていた私に、苛立った声が届く。

ものすつごく現実逃避をしていたけど、今の現状といえば、向かい合つようにサスケが立つてる。少し離れた場所にはイタチ。さつきまでのほのぼのとした…まあ、殺伐としてたけど。兎に角お茶と菓子だけは美味しかった状況から一転。サスケはクナイを構えているし。

五歳の子供に刃物は持たせちゃいけません。

そんな現代の常識がガタガタと音をたてて崩れているんだけど、サスケは知った事じゃないとばかりに怒鳴るように叫ぶ。

短気なお子様め。

「……はあ」

思わずついた溜息に、サスケの眉がぴくりとはね上がる。

「構えないで余裕だな」

「別に。俺の準備は終わってる。気が付かないか？」

既にチャクラの絃は張り巡らせてある。

どうにもこうにも、父さんと手合わせする時の癖がついてるのかな。絃はほぼ自動で使えるようになってる。我愛羅の砂じゃないけど、系統的には同じなのかもしれない。

「サスケ。油断するな」

私の戦法を知っているイタチが、サスケに言葉を投げかける。

「はっ。こんな女みたいなヤツに俺が負けるかよ」

折角のイタチの忠告も、右から左へ軽く流すサスケ。五歳児にこんな言葉を使っているのか迷うけど、細くて小さくて大人になれば優男？な見た目はなめるよねー。あはは。まあ…女みたいなヤツって女ですけどねー。

つつこまないけど。性別の件は不透明でいいからつつこまないけど、絃に気が付かないサスケに対してはどうしようかな。

下忍未満に気付かれたら、あの修行をしている立場としてはどうしようもない程腕がないって事だから、気付かれたら逆に私が困るんだけどね。

サスケの様子を伺いながらも、どんな言葉を返そうかなあ、なんて内心はかなり暢気な感じだ。

本音だろうけど挑発とも受け取れるサスケの言葉だから、私もちょつと煽ってみるかな。

「口だけは達者なんだな」

これが煽りになるのかはよく分からないけど。

「——なんだと！」

微妙な所だったけど、どうやら見事に煽られたらしい。

やっぱりサスケは相当短気だと再確認したら、サスケはクナイを持ったまま地面を蹴り上げ、私との距離を詰めだす。

というか、足にチャクラを纏わすやり方とかを力カシから教わってないから、かなり遅い。本当に遅い。

今のサスケを見ると、ナルトは心底規格外だ。

「イタチさんも弟に甘いんだね」

クナイを持った右腕を振り上げ、私に向かって一直線に向かってくる刃先。

その一瞬の隙間をぬうように、私はイタチを見る。まあな、とにかくに肩を竦めるイタチはどうやら自覚があるらしい。

イタチと視線だけで会話してる間も、サスケは速くないなりに近付いてきてる。まあ、速くないって言い切っちゃうけど、実際は年相応より速いしチャクラもあるんだろうと思う。

それでも、近付かせないけどね。

一撃でももらったらイタチがチクチクと煩いだろうし、それに――流石に下忍未満を近付かせるような防御網は敷いていない。

「――ッ!？」

かかった。

私の張り巡らせた絃に身体を絡め取られるように、振り上げた右腕をそのままにサスケの動きが完全に止まる。

動けば動くほど絡まる、なんて絃じゃない。かかった瞬間に雁字搦めの絃。出ないと父さんの動きは止められないからね。

ぼてぼてと絃に絡まったサスケの前まで歩き、動きを止める。

これでもかかっていう程つり上がった眉と眉間の皺が、サスケの心情をこれでもかと自己主張しているんだけど、そんな事は知った事じゃありません。

「俺の未熟な防御とはいえ、お前には破れない」

まだ、ね。ただけどね。

ちなみに、これが九尾のチャクラを操るナルトに瞬殺されたのは秘密だ。あの時はテンには白い目で見られ、ナルトには腹のたつぽ

ど小馬鹿にされつつ肩を竦められたんだよなあ。

はあ。

また溜息が漏れた。

私が溜息をついていると、ここに来る途中に飛び立ったテンがゆつくりと私の肩に降り立つ。別の意味で気まずいこの状況で帰ってきたテンとしては、今の方がマシらしい。まあ、さっきの気まずさは半端じゃないからわからなくもないけどね。

「イタチさん。これでいいですか？」

サスケからチャクラの絃を外しつつ、無傷というより近付かせてもないよ、とイタチを見れば…。

「ああ。十分だ」

すつごく満足そうな表情をされた。

おや？

何でだろうって放置してたサスケを見れば…。

見なきゃ良かったとつい顔を背けてしまう。

「夜月ランセイか。覚えた…覚悟しろよ」

おおう。思わず小さな悲鳴が口から出た。この子って将来極悪非道な大蛇丸の蛇ですら取り込むような成長を遂げるんじゃないかったっけか。

そんな猪突君に、覚えた、覚悟しろと言われた私。

「別に覚えなくていい」

心の奥底からの本音だったんだけど、サスケはやっぱり舌打ちで答える。舌打ち好きだね。似合ってるから別にいいんだけどさ。

「俺なんか覚える必要も無いって事かよ」

「……」

何故そうとるかな。

執念深そうだから忘れちゃっていいって言ってるのに。

今日は精神的に疲れたなあ、と肩を落とせば、いつの間持ってきたのかイタチが私とサスケに水を差し出してくれた。

瞬身か。瞬身を使ったのか。というかやっぱ私とは桁違いに速い。イタチがいつ取りに行ったかなんてまったく気がつかなかったけど、喉がカラカラで水は助かったと頭を軽く下げながら受け取る。

コクコクと一気に水を飲み干し、乾いた喉を潤す。サスケも一気に飲み干して、やっぱ私を睨み付けた。

…私を睨み付けるのが標準装備になったのか。

「イタチさん。俺に、弟さんの相手は無理ですよ」

こんなに嫌われてちゃ友達は無理だね。私に対して、何でか睨むのが標準になったみたいだしね。

そんなわけでイタチにはごめんなさい。

何かサスケの友達にしたがってたみたいだけど、私には荷が重いとあつさりと放棄。

「そうか？」

「うん。無理」

イタチの不思議そうな声音に、迷わずに頷く。

「友達は、嫌われる存在じゃない」

あんな腹に色々なものを抱え込んでいるナルトでも、最近では随分と仲良くなってくれたと思うんだよね。

他愛ない日常会話も増えてきたし。

何より笑う回数が増えた。

ナルトとの友達の道を着々と歩んでいる私としては、今のサスケの関係は友達っていう感じはまったくしない。

もう一度イタチを見上げ、そのままサスケに視線を移す。

「弟さんも俺ももうじきアカデミーだろ。友達ならそこでつくれる」だから、私じゃなくてほのぼのと会話の出来るお友達を見つけてね。そんな意味を込めて、会話に幕を閉じた。

つもりだった。

何でかイタチには肩を竦められ。

サスケには般若の表情を浮かべられ。

おまけとばかりに肩にとまっていたテンには、状況を把握しろと言わんばかりに頬を軽く突かれる。

というかサスケ。それは五歳児の表情じゃない。

そして空気の読めないイタチに肩も竦められたくないんだけど、そう思うのは私だけだろうか。

「お前なんか友達になるはずがないだろッ！！！」

ビシッと叩きつけるような勢いで指を指され、サスケはフン、と言いながらさっさと建物の中へと戻っていく。

一体何だ。

何が言いたいんだ？

だから友達は無理だって言ってるのに、友達になるはずないって…。

「サスケは素直じゃない」

「そうでしょうね」

そりゃ、イタチへの態度を見てればよくわかる。

「一度負けた相手に背を向けるような性格でもない」

「……へえ」

確かにそうっぽいよねえ。

ん。つまり何だ。イタチのフォローの意味を考えてみたら一つの言葉が思い浮かぶ。

「つまり、敵は敵でも好敵手認定？」
トモタチ

「つまり何も、見たままだけだな」

「……………」

何だろうなあ。

イタチにこういう事言われるのって何かダメージがあるんだよなあ。

空気を読めないわけじゃないのに、天然疑惑が発生したイタチよりも空気が読めない感じになると、地味にへこむんだよなあ……。

私からそんな評価を受けているイタチといえば、表情をしかめっ面に変えた私の撫でやすいらしい頭を撫でながら。

「サスケを頼む」

と、意味ありげな言葉がイタチの口から出てきた瞬間、私は反射的に跳び上がってイタチの肩を掴み、強制的にしゃがませる。

「？」

不思議そうな表情をするイタチだったけど、そんな事は知った事じゃない。

まったく、イタチもまだまだ子供だろう。

忍として色々とやってるけど、まだまだまだ子供だ。それなのに抱えすぎだと、私はいつものお返しだとばかりに、イタチの頭をこれでもかかっていうぐらい撫でた。

「イタチさんが一番です」

サスケにとつてみたら、イタチが一番だよ。

「……………」

伝わったかどうかは分からないけど、イタチは口を噤んだまま、黙って私に撫でられ続けていた。

日向の自己主張は白眼だ

カンツカンツと無言のまま金槌を振るう。

修行も大事だけど、こちらの修行も疎かには出来ないんだよね。やっぱり自分の使いやすい武器を思いのままに作れるってのはすごくいし。

折角打てるスキルがあるというのに、打たないのは勿体無い。

しかし、先日の中忍のうちは兄弟騒動は疲れたと、小刀を打ちながらも肩が下がりそうになる。あのマイペース…というより、我が道を行き過ぎる兄弟はなんだろうか。

あの後ナルトに愚痴ったら、「ハッ」と口先で軽く失笑されたのは記憶に新しい。どうやら名門うち一族の兄弟は知ってるらしいんだけどね。まあ、イタチの方の天稟は有名だろうし知らない方が珍しいのかもしれない。

「……そういえば、中忍になったんだっけか」

天稟って言われるのはやっぱり写輪眼と中忍に抜擢された所が大きいんだろうなあ。それがイタチにとって良いのか悪いのか。多分このままでいくと悪い度合いの方が大きい気もするんだけど。

まあ、それはとりあえず置いて……イタチが父さんに注文する武器も、前よりも実践的で個性的なものに変わってきたような気がする。

ふむ、と金槌を置いて腕を組む。小さい頃から可愛がってもらった割りに、プレゼントを用意した事はなかった。先日はサスケとも友達になったっぽいし、イタチとの縁も深くなったような気がしないでもない。

ここで一回今までのお礼として、プレゼントを渡すのもいいかなあ。そうなるって何かな。何がいいかな。目の前の打ち途中のクナイを視界の隅に収めつつ、私の意識はすっかりとイタチのプレゼント一色になっていた。

出来れば、平和的にいつてほしい。そんな意味合いを込めて…。

「(つて、イタチの里抜けって何時だろう)」

何となく下準備を整えてるような雰囲気からもうじきだと思っていたけど、そういえば中忍になってから暫くは里にいたような気がする。

二重スパイだったかなあ、とも思っただけど、如何せん五年以上前の事。随分と記憶があやしげだ。

幼い頃に何があったっけかなあ…。他にも何かあった気がするんだよねえ…。

《どうした?》

タイミング良くぱさり、と銀の羽を軽やかに動かしながら、私の肩にとまるテン。

ここに居る時は、私の邪魔をしちゃいけないっていうのと、腕を動かすからテン自身が落ち着けないって事で、少し離れた場所で寛いでる。

「ん……何か、里の人間に関わる事で、嫌な出来事があったような気がしなくもないんだけど」

《……ランが、生れ落ちた後にか?》

「そうそう。幼少期にね。この辺りがもやもやとするっていうか、防ぎたい事があった気がするんだよね」
なんだろう。

喉辺りまで出掛かつてるのにそれ以上が出てこない。完全に悩みだした私の肩にとまっていたテンが、ツンツン、と私の頬を軽く突く。

《ラン。恐らくソレは日向のヒザシの死だろう》

「あ……」

あっさりと言われたテンの言葉に、私は目を見開いたまま両腕を力なく垂らす。

言葉がないというのはまさしくこの事を言うんだろっか。すっかりと忘れてた日向の事件。

「……ッ。ネジは……」

《呪印を押されてはいる……な》

「そ……だよな」

この世界で会った事はないけど、知っている死を防げないっていうか、忘れきってたっていうのは結構くるっていうか。

何とも言いがたい表情で頂垂れる私に、テンは宙でくるりと回り私と同じぐらいの子供の姿になる。

銀の髪に青い瞳。色彩は私と同じ。

ぺちぺちと私の頬を小さな手の平で撫でるように叩くテン。

《ラン。そなたは、我と契約を結んだ。故に生れ落ちた後は自由が利かぬ》

ジッと私の目を真っ直ぐに見つめ、言い聞かせるようにゆっくりと言葉を紡ぐ。確かに私は生まれた直後から普通の赤ん坊よりも自由が利かなかった。よくある話で、強大な力が身に宿り、それを

身体に馴染ませる為に結構な年数がかかったのだ。

ひよつとしたら、無垢な魂じゃなかったから時間がかかったのかもしれない。今のナルトを見ると私みたいな事は起こらなかったみたいだし。

私の場合は四歳を過ぎるまで、自分で歩く事が出来ずに両親に抱っこされて育ったんだよね。その時、カカシやイタチや、他のお客さんにも抱っこされながら育ったから、鍛冶屋のお客さんとはかなり仲良しだったりもする。

何か寝たきり？の私がこうして修行したりしていると、感無量みたいだね。

「よしっ」

パンツと自分の両手で頬を叩いて気合をいれる。

「日向に行ってみよう。父さんの納品についてく」

《うむ》

となると父さんの仕事状況の確認だね。

私は置きっぱなしになっている道具を片付けて、足早に居間へと向かう。今頃父さんはお茶の時間。母さんと一緒にのんびりとお茶を飲んでるから、居間にいるのは間違いないはず。

けれど珍しく父さんがお茶してなくて、どうしたのかなって思いながらも出入り口まで行ってみたらお客さんの姿。常連の人はこの時間帯は外すから、慣れてない人だろうなあ、って思ってたんだけ

どね。

背中が邪魔で来客の姿がまったく見えないんだけど、基本常連さん以外は私には関係ないから、お仕事の邪魔をしないように壁に背をつけて様子を見るだけにしておく。

「クナイかぁ。俺はクナイよりも刀や小刀の方が多いしな。希望通りの品は難しいと思うがなぁ」

ぼりぼりと後頭部を掻きながら、しみじみと言った口調で父さんがお客さんに話してる。うん。みみっちいのは性に合わないって常日頃言ってるもんね。だからクナイなんかは一般的なもののしか打つてないけど…それじゃ駄目なのかな。

「手に馴染むものがいい。これだと今の俺の手には大きい」

「まあなぁ…。手に馴染むつつと…ラン」

「ん？」

何？ 突然呼ばれたけど珍しい。

壁に寄りかからせてた身体を起こし、父さんの隣まで歩いていく。

「お前の打ってるクナイを見せてやれ」

「別にいいけど」

本当に珍しいな。父さんがそんな事言うなんて。

そんな珍しい行動を父さんにさせた珍客をここで初めて見てみれば…。

「（噂をすれば影…）」

私が飛び込むんじゃなくて、相手から飛び込んできたと驚いたらいいのかなのか。私が原因でフラグが乱雑するんじゃなくて、父さんが腕の良い鍛冶屋だから勝手に寄って来るんだろうなとここで再確認。

忍にとって武器は命だし。

命運をかける時もある。

そんなわけで、腕利きの鍛冶職人の父さんの下には、名うての忍が訪れたりするんだよね。

「コイツが？」

つと、飛びかけた思考を引き戻すように、私の前には不機嫌を隠しもせずに表情を顰めさえ、尚且つ声も低くして私を睨み付ける子供が一人。

そうか。日向の自己主張は目だ。

うちはと違って、日向ですと言わんばかりの自己主張は白眼だ。ここであっさりと先日の疑問が解決したんだけど、新しい疑問がわき上がる。

ネジが何故ここにいる。

脳裏に沢山のはてなマークが浮かぶが、目の前のネジはそんな私に怪訝な眼差しを向けたまま、鼻先で笑った。

何だろうなあ。

その反応。すつごくデジャブだねえ。なんていうかうちの某弟君と反応がまったく同じなんだけど気のせいかな。

「こんなガキに打てるのか？」

やっぱり似てる。天才と呼ばれる人間はどこかしら似る所があるのだろうか。

心底思いながら、私はチラリ、と父さんの方をしてみる。別にクナイを見せる分には全然構わないんだけど、見せた方がいい？という確認の意味も込めてね。

すると父さんは、一度だけ軽く頷いた。

ああ、見せるんだね。

「見る気があるなら、付いてくればいい」

ふわりつと腰に巻いてある布を風に靡かせて、私はネジの問いには答えないまま背を向ける。

興味があるなら付いてくればいいし、無駄だと思うなら帰ればいい

い。

答えない代わりに態度で表してみた。

「流石ハニーの子。クールな感じが似てるよなあ」

後ろの方で父さんがしみじみと呟いてる。

父さん相変わらずだね。流石にネジが引くんじゃないかってチラリと様子を確認したら、案の定引いてた。

何だこいつと言わんばかりの目線で父さんを見てるんだけど、その気持ちはよく分かるよー。

「チッ」

その後忌々しげな舌打ちが聞こえたんだけど、直後に続く足音からどうやら付いてくる事にしたらしい。

「本当にあるんだろうな」

「さあ」

「……」

「俺の使いやすいものがある。アンタのは、知らん」

父さんみたいに商売じゃないから、所詮私の打つものは趣味しかないしね。それが分かったのか、ネジは何も言わずに黙って私の後をついてきてた。

何か、ちよつとイメージが変わったかも。

上から目線が標準装備になっていうイメージがあったからね。

名門の肩書きは面倒だ

トテトテトと、忍の卵にしては間抜けな音が廊下に響く。

先頭に立って歩くのは私。その後が続くのがネジ。一方通行な顔見知り… まではいかないけど、多分良く知ってる相手。

そんな相手と一緒に歩く割に会話はなく沈黙が場を支配する。なんだろうなあ。

最近こんなばっかだよなあ。

つい先日こんな気まずさを体験したばかりじゃないだろうかと一度対人関係に効果のある神社にお参りに行こうかを本気で考えながら、作業場の戸をガラリと横に開けた。

さっきまで私が使っていた作業場はまだ熱が籠っているような気がするが、今は作業を再開する為に戻ってきたわけじゃない。

棚にしまっている私がついたクナイが収められた布を手に取り、それをネジの前で広げて見せた。

小指サイズから一般的なサイズのクナイまで、大きさは様々。ここまでくると趣味の域に達しているけど、趣味だから仕方ない。昔から凝り性だったんだよね。

私の趣味の領域のクナイを見たネジの反応は素直だった。一瞬驚いたように目を見開いたけど、次の瞬間には私を見て、

「手にとっても？」

と聞いてきた。

「どうぞ」

ここまで見せておいて断る理由はない。というわけで、あっさりと頷くと、ネジはゆっくりと、一つ一つ確かめるように大小様々なクナイを手に取り、その感触を確かめていく。さて、こうなると私は手持ち無沙汰だ。

態々人が選んでるものをジッと見るのは苦手だし。となると、ここで簡単に出来る作業にでも取り掛かるうかと、棚から小刀を取り出し、ソレを磨きだす。

この作業自体集中してやってしまえば時間を忘れるけど、忘れすぎるのも問題だったりする。ネジも集中しているからいいかと、神経を研ぎ澄まし刃先を見つめた。

研ぎで失敗すれば台無しだ。柄の意匠もあつたものじゃない。柄や鰐の意匠に拘るのは現代人の感覚のような気もするけど、やっぱり綺麗な方がいいじゃないかと思うんだけどどうだろう。使えればいいという人が大半だろうから、あんまり理解されないだろうけど。

カチャリカチャリと、ネジがクナイを持つては置きを繰り返す音と、シュツと私が刃物を研ぐ音だけが工房に響く。

集中してしまえば余計な音は耳に入らなくなる。

私と、研ぎ石と、刃だけ。

これが、今の私の認識。

けれどそこに待ったがかかる。テンが私の意識に介入し、ネジの存在を思い出させてくれる。ああ……うん。終わっただね。

一定の間隔で動かしていた指先を止め、ゆっくり息を吐き出す。そして顔を上げてみれば、いつものランセイだ。

職人を目指すランセイでいると、いつもとはちょっと違う感覚に入るから、その辺りはあまり人に見せないようにしてたりする。ちよつと恥ずかしいし。没頭する趣味を見られるのは、今思えば昔から苦手だったかもしれない。

「いいのはあったか？」

私を白い目に映しているネジに聞いてみれば、戸惑ったように視線をさ迷わせた後、小さく頷かれた。

流石6歳。まだ反応が可愛い。あの一件でちょっとすれてるんだろうけど、あんな出来事があれば仕方ない。トラウマ——と一言では言い表せない幼児体験だ。

「これが…」

「ああ。これが」

試しに色々なクナイやクナイもどきを作りまくったけど、それにはちよつと大きかったやつだ。確かに、これならネジの手にぴたりだろう。

けどこの一つのクナイで足りるわけがない。

ネジの手の平を確認して、実際クナイを握ってもらって幾つか作るかなあ。

「手」

というわけで、手の平を見せてね。

些か言葉が足りないような気もするけど仕方ない。そういう設定をしちゃったからね。しかもその設定を押し通さないとボロが出る……？」

案の定意味が分からないといった表情を浮かべるネジの手を勝手に掴み、手の平を確認してみる。子供の手じゃないよねえ。

ふにふにと軟らかい子供の感触とは程遠いネジの手。コイツもかと思うけど、世界を考えてこんなものかと思い直す。ネジの場合は分家とはいえ日向だしね。名門の名はそれだけでプレッシャーもあるんだろうし。

「何をやっている？」

ネジの手の平を見つめたまま口を噤む私に、当たり前前の疑問が届

く。

「確認。クナイを握ってくれ」

「……」

疑問を浮かべながらも、ネジは私の言った通りクナイを見せるように握る。大きさは丁度いいか。成長期だからすぐに小さくはなるんだろうけど、自分だけの道具が欲しいっていう気持ちはよく分かる。

「何本欲しい？」

「作ってくれるのか？」

「ああ。感想を教えてくれ。参考にする」

自分だけの感想じゃいまいち参考にならない部分もあるだろうから、ネジが使った感想を教えてくれるのはすごく助かる。

そう思っていたら、途端にネジの表情が歪んだ。

……ん？ 今の会話の何処に琴線に触れる何かがあったのかな？？ 分からないからとりあえずネジの様子を伺うんだけど、ネジは手に持ったクナイを自分の手を傷めそうな程力を込めて握り締める。

「それは、俺が日向だからか？」

心の奥底から吐き出された言葉。

どうやら、私がネジに作ると言ったのは日向だから、と受け取っていたらしい。

「日向——ね。木の葉の名門」

私の言葉に、微かに肩を揺れさすネジ。

「ソレが、俺に何の関係がある？」

気に食わなかったら関わらないし。

嫌なのに媚びへつらう真似なんかしたくないし。

私のものすつごく本音な言葉に、ネジは目を瞬く。うん。その表情はいいよ。年相応な感じがして可愛い。

「未熟な俺の試作品を試しに使ってもらう。お前は使った感想を俺に言う。俺はそれで改良が出来る。互いの利だろ？」

何の事はないとばかりにあっさりと言ってのけた私に、ネジは言葉がないらしい。どうやら日向一族だからと、特別扱いもされているけど色眼鏡でも見られているんだろう。流石木の葉の名門。色々面倒そうだなあ。

しかしこれで言葉は終わりじゃないと、珍しく長い会話に挑戦してみる。

「俺が気に食わない相手だと思えば、武器は打たない。例え影の名を持つ長であろうと、名門であろうともな」

寧ろそんな事で面倒になったら、里から旅立って終わりです。

まだ忍者じゃないし。抜け忍でもないし。後十年程経てばミナトさんもクシナさんも傷は癒えるだろうし。そしたら堂々と帰れるだろうしね。

何を馬鹿な事を言っているんだとばかりの私の態度に、ネジの肩から力が抜けた気がした。

「はっ…はは。日向に取り入ろうとは思わないのか？」

むう。まだ言うか。

まったく…。

「馬鹿、か？」

右腕を伸ばして、ネジの額にデコピンをかます。

私の動きについてこれなかったのか、痛みが走った後に額を押さ

えたネジが、今度は別の驚きを瞳に宿しながら私を見た。

まあ…馬鹿と言われたのも初めてだろうけど。日向の天稟の持ち主だしね。しかし、私から見たら全然子供です。自分の感情の出し方も分らない子供は、スキンシップで好きだよーって伝えまくりたくなる。友達からは過度過ぎるから！と突っ込まれた日中時間問わずなスキンシップ。

基本子供は大好きさ。素直な子も捻くれた子もね。可愛いし。

「取り入った所で面倒だ。俺は俺の好きなものを作る。それだけだ」というわけで、ネジが日向であろうとなかろうと、私にはまったく関係ありません。

そう言い切れば、ネジの表情が何とも言えないとばかりに歪んだ。

……周りに碌な大人がいないのか？

そんな疑問が沸くには十分なネジの反応に、私はどうしたものかと一瞬頭を悩ませるが、あっさりと結論を出す。

悩んだ所で答えは同じだ。

「アンタが気に入れば俺の所にくればいい。俺もアンタを気に入れば作るさ」

「……………」

ぶっちゃけ、友達になりや無料で作るって言ってるようなものだけど。

「はは。変な奴だな」

お腹をかかえて笑いを漏らすネジに、言われた言葉は引っかかるものの笑わせておく。

何ていうかさ…久しぶりに笑ったって顔…。

「アンタに言われたくはないが…俺は夜月ランセイ。自己紹介がまだだったな」

「ああ…俺は日向ネジだ」

「そうか。今から作るか？」

自己紹介は終了。

クナイが一本で足りるわけがない。
というわけで聞いてみれば、やっぱりネジは笑ってた。

「ま…マイペースな奴だな」

最近それをよく言われるんだけどさ。

木の葉の住人にはあんまり言われたくないような気がするんだけど、気のせいかなあ…。

まあ、子供を忘れた子供が年相応で笑ってくれたらいいんだけどね。

名門の肩書きは面倒だ（後書き）

長くなりそうなので二つに分けました。
次は短めな話しになりそうです。

趣味が合うと仲良くなりやすい？

そんなわけで、只今ネジと向かい合わせでクナイの意匠を考えております。何故そういう話しになったっていうのは至って単純。

単に、じゃ、作る？という私の言葉に、それなら意匠から決める。とネジが言い出したからだ。

多分私専用のクナイを見たからだと思う。私専用のクナイはタイプが幾つかある。使い捨てのもの。それは当然、持ち主は特定されない一般的な材料と形のクナイだ。私専用っていうぐらいだから、見るからに持ち主が特定出来るものもある。

クナイに分類していいのか分からないけど、これは使い捨てじゃないやつだ。

シンプルなデザインながらも、鰐や柄には拘る。段々と腕が上ればもっと細かいのも出来るようになると思うんだけど、今はこれが精一杯。

そんな品々を見て、ネジがそれじゃあ、と言い出して一緒に顔を付き合わせて意匠を考えてるんだけど…。

「植物」

「……」

「風景」

「……」

「左右対称」

「……」

「動物」

「……」

「鳳凰や龍？」

「……」

何も答えてくれないってなんだろうなあ。

いや……言葉だけじゃイメージがつかないのかも。手作りノートを持ってきて、サラサラと軽く書く。

大まかな線だけど、何も無いよりはイメージが掴みやすいはず。ノートを黙って覗き込むネジは、時折頷いてるから何となくだと固まってきたんじゃないかな。

「お前は？」

「ラン」

お前呼ばわりは嫌なので、とりあえず訂正を入れてみる。

ついでにジツとネジを見上げてみれば、ネジは微かに眉間に皺を寄せながら蚊の鳴くような声で私の愛称を呼んでくれた。

根負けした感じがするけど、まあいいか。長い付き合いになりそうだし、愛称で呼ぶのに慣れて損はないと思うしね。

「俺は、気の向くまま。外にスケッチに行つて、その時気に入ったものがあれば作る」

武器だけじゃなくて、工芸品にまで手を伸ばしてたりするんだけど、それはとりあえず言わなくいいよね。

工房の片隅じゃなくて、棚に堂々と木彫りやら何やらが飾ってあるけど、目に入っていないみたいだし。

「そうか」

「ああ」

しかし…無口設定をやつてるとこんな時は辛いなあってしみじみと思う。ネジも喋るタイプじゃないし、私も必要以上には話さないつまり沈黙が多くなるわけだけど、ネジは一切気にならないのかひたすら私のデッサンを見てたりする。

すごいね。この沈黙が気にならないって。六才児のはずなんだけ

どねー。ネジって。

「描いたものはあるか？」

どうやら、走り書きじゃなくて他の物を見せてという事らしい。コクン、と一回頷き、私は棚にしまつてあつたノートは何冊か手に取る。自室にも何冊か置いてあるけど、とりあえずはこれだけで足りるだろう。

自室のは今度機会があつたらにしておこう。うん。

棚から取つてきたノートを全てネジに渡して見だすのを確認した後、私はネジから返してもらつた描きかけのノートにサラサラとデザインを描き始める。これはナルト用のデザインだ。

金と銀でおそろいにして持つんだと言つた時のナルトの冷たい眼差しを忘れたわけじゃないけど、その程度でめげる訳がない。

かつこいいものさえ作れば、きつとナルトも持つてくれるはず！そんな希望を忘れずに、私は一気に何枚かのデザインを描きあげた。

気まずさから逃げる為の現実逃避なのか、今日は筆が進むなあ。

本当に。しかしネジからの視線が何とも言いがたいよなあ…。

「何だ？」

デッサンを見たいのか、私と話したいのかどっちだかつつこみたくなるネジの態度に、私は忙しなく動かしていた左手を止めてネジの方に視線を向けた。

「あ…ああ」

まさか話しかけられるとは思つていなかったのか、どもるネジ。ゆつくりでいいから話したい事があるなら話せ、とばかりの視線を向けながら、私は急かすのでもなく他の事をやりだすのでもなく、ただネジが話したのを待っていた。

というか、本当に六才児ってこんなだっけか。

ここの子供って子供らしくないよね。

話したい事を話さないっていうか、素直じゃないっていうか。

「どうして…初対面の俺に、日向の恩恵を預かりたいわけでもないのに、こうやって話す？」

「……」

え、それ？

聞きたい事って…？

思わず無言になった私に、ネジは真面目な表情でひたすら私を見てる。

だからこれって子供の会話じゃないよね。そう思うのは私だけかなあ…。

いや、答えるけどね。

寡黙を押し通してるからってスルーしたりはしないけどね。

「クナイに拘るのが俺と同じで、面白いヤツだと思ったからだ」

さも当然とばかりに淀みなく言ってみせれば、ネジが一瞬だけ瞳を瞬く。そんなに驚くような事を言っただろうか。

今度は逆に、私がネジの反応を待つてみる。

時間だけがいたずらに流れている気もするが、こういう沈黙は気にならない。待たれていると思えば気になるけど、自分が待つ分には構わない。

「……そうか」

「ああ」

「「……………」」

待ってみたけど、やっぱり沈黙だった。

ネジの対話能力は育ってないのか。

育ってないんだろうなあ。

「ネジ。俺は大体ここにいる。外に出れば修行してる。

何かなくても、来ればいい」

だから、ネジに向けて言ってみた。

やっぱりネジは驚いた顔をしてたけど、やっぱりそういう年相応の顔を見るのは嫌いじゃない。

私の方も困ったヤツだな、なんて苦笑を浮かべてた。

「……………ああ。ラン。お前も、俺に声をかける。俺も大体修行してる」

「わかった。ネジ。お前もな」

なんていうか…。

あのネジとこんなふうに仲良くなるきっかけをあつさり得た事にも吃驚だけど、やっぱり趣味が合うと気が合いやすいのかな。

ネジが開いたままのスケッチのページをみながら、しみじみとそんな事を思ってた。

日向宅へのお誘い

目を閉じ、神経を集中させる。

一点だけじゃなく、360度全てにチャクラを張り巡らせ、私は散漫な動作で十指を微かにだが動かした。

十指の絃を意識して思いのままに動かすっていう真似は正直難しい。でも、始めはチャクラを満足に練る事も出来なかった事を考えれば、十指中八指は思い通りに出来るようになった。

年齢を考えれば十分すぎる程の成長速度かもしれない。けれど、足りない。

何もかもが足りないのだ。

タンツ、と地面を蹴り上げ、まるで舞いでも踊るかのように両腕を交差させていく。将来的には十指だけじゃなく、身体から練り上げたチャクラだけで絃をつくり、手足の動き無しで自由に動かしたい。

原作で、九尾のチャクラを纏ったナルトがチャクラだけを動かしてた。意志の力で。それを正気を失わず、自分を保った状態で維持し手足の如く動かす。

道のりは遠いけど、それぐらい出来なければ尾獣を全て手に入れようとしているマダラに勝てる気はしないし、これから確実に起こるであろう事を阻止出来るとも思えない。

「水遁の術——水流陣」

絃を操りながら、別にチャクラを練り上げ水遁の術を完成させる。

それを、無属性のチャクラの絃で消滅されるのが今日の課題だ。
新術の開発もしたいけど、始めに絃の強化の方が重要かなというわけ、まず始めに色々な術を相殺する事から挑戦してみる事にした。
本当は相殺が目的じゃないけどね。

まあ、しかし相殺する事も出来ないんじゃないとお話にもならないというわけで、水流陣が濁流に変わる前に絃で斬るように消滅させていく。

…なんていうか、自分で術を完成させてそれを消滅させるっていうのは忙しい。下手に間をあけたら自然破壊に勤しむ事になるし、かといって威力を弱めたら鍛錬にならない。加減も難しいな、なんて音に出さずに呟いてみると同時に背中で感じる違和感。
チリ、としたようなざわめく感覚。

「誰だ？」

そう…誰かに見られているような感覚。

絃を相殺の為じゃなく、探索に切り替えて誰かを探る。

「…ネジ、か」

けれど探るより先に、最近仲良くなった白い瞳を持つ子供が私の前へと姿を現した。のんびりというか、堂に入っているというか。
肩で風をきらなくてもいいのに、と内心突っ込みながら、私はネジの到着を無言で待つ。あれからネジとはクナイや小刀や私の持っている特殊な絃の事でも話したけど、こうして内緒の修行を見られるのは初めてだ。

というか、ネジの前でまともに術を見せた事はない。

つまり、こっさりこっさりやっていた事を見られたという恥ずかしさはあるものの、それを表に出すような精神年齢何十歳じゃない

いのだ。

「……ランは修行中か？」

「ああ」

「絃…は、例のものか」

「ああ」

私がチャクラで作る絃。それにも元となるものが存在していたりする。元は無色透明の絃。チャクラを流し込む事によって、銀の光を放つ特殊なものを加工し、身体に身につけている。

今はイメージし易い両腕にブレスレットとしてつけているけど、最終的にはピアスにしたいなと思っていたりとか。ちなみにこの辺りの特殊素材は、どうやら私の一族の特殊技術らしいけど、私自身はまだ作れなかったりする。父さんが作ってくれたものを使わせてもらったりとかね。

将来的には、これも作ってみたいなあとか画策中だったりもする。が、そこに追いつくにはどれぐらいの年月がかかるのか。現代では中途半端な凝り性だった私はここにきて、相当の凝り性に進化したらしく、そういった研究にも余念がないのだ。

しかし時間が足りない。

たった五年しかランセイとして生きていないのに、こんなに切迫されるような時間の足りなさを感じていたら、きっと過労死してしまう。

そんな予感が過ぎらないわけでもないが、追求する事はやめられない。

悪循環だが、自分で選んでいるんだから仕方ないときっぱりと割り切る。

未だにジイと穴が開くんじやないかと思う程見てくるネジに、右腕に細々と巻かれているブレスレットを見せた。

それなりに繊細に編みこまれた絃。これも将来的にはって事で現在途中段階だったりもする。

だけどネジには十分だったらしく、編み込みをじっくりと確認しながら「すごいな」なんて声を漏らしてて、その言葉が嘘偽りなく感じたから逆にこっちが嬉しくなってきた。

成長段階で、これからだって事は重々承知しているけど、褒められるのはやっぱり嬉しい。

「絃が使えるようになったら、編んでやる」

まあ、ネジなら大丈夫だろうけど。

私よりも上手くなるんじゃないかという可能性は高いけど、それはそれでいいと思うし。ナルトにも作る気にいるから、二つ作るのも三つ作るのも同じだしね。

「あ…ああ」

そして私の言葉に驚いたように目を瞬き、その後ゆっくりと何処か照れたように目を伏せていくネジ。

素直に、嬉しい、という言葉は言えないけど、これで十分だと私は作るという意味表示を込めて頷いた。

「所で…」

しかし、何となくネジの登場の意味を考えると話しが脱線したような気がして、ここで軌道修正をかける事にした。

「何か用だったんだろ？」

ネジの表情を見てたら、すっかりと抜け落ちていたらしい。

今度は呆気にとられたというか、間抜けな表情を浮かべたけど、そんな忘れた自分に照れたのか頬を軽く染めながら、言葉も短く首を上下に動かす事だけでの是と答える。

「俺の家に来ないか？」

照れていた所為か少し声は小さく、つつかえ気味だったけどそれがまた年相応に見えて、普段はクールっぽいネジも可愛く見えた。いや、元々可愛いんだけどね。

精神年齢ん十歳からすれば、大体は可愛く見えるんだけどね。

「ああ。行く」

とりあえずネジからのテリトリー上陸の許可を無下に断るわけもなく、私があつさりと言くと、何処かネジはホツとしたような安堵の表情を浮かべたかに見えた。

しかしそうになると、分家とも言えどもネジは日向だ。

父さんの後にくつついて見学しようとしていた日向を垣間見えるのかと、ちよつとだけテンションが上りそうになるけど表に出したらネジが拗ねるかなあ。

まさか日向を観光地指定しているなどとは口が裂けても言えるはずがなく、私のシンプルな答えに満足し、ネジはこつちだと言いながら早々に連れて行く事にしたらしい。

けれどこれが、普段は冷静な表情を保っているランセイとしての仮面に輝を入れる事になるとは思わず、私はネジの隣を歩きながらのんびりと構えてた。

日向宅訪問・1

うちはも広がった。

が、日向も負けず劣らずで広がった。というか、うちも工房があるから何とも言えないけど、あの道場の広さはなんだ？

通り過ぎる時、横目でチラリと確認していったけど、うちの工房どころの話じゃない広さ。そこで何人もの日向一族の人が訓練をしたりするんだろうけど、今はそれ程頻度良く使われている感じはしない。

ヒザさんの一件からかな。なんて思わず思ってしまったけど、それを口に出すような真似はしなかった。

無口キャラにしておいて良かったと心底思う。

長い廊下を子供の足で歩くのはそれなりに大変だけど、常日頃鍛えているおかげで苦にはならなかった。というか、名家は歩くのが基本か？

うちはも広がったけど、何でこんな風に固まるんだろ。固まった所で混乱を起こされたら、その間に誘拐事件だって発生するだろうし。

そう思うと、名門といえども防御は弱いのか、里の中にいるからと安心しきっているのかは微妙な所だけど、防犯面については強固ではなさそうな印象を受ける。

特に写輪眼や白眼なんてものは、他の忍が欲しがってる血継限界だろうに。

日本じゃ他人の目を取ってその場で移植して、元通りに見えるようになる、なんて事は無理だけど、この世界じゃソレが当たり前なの

ように通用するしなあ…。

そんな風に考えると、今更ながらものすごく怖い世界に来てしまったんだと、一瞬だけど恐怖で身が竦みそうになる。

あの時の私は、助からなかった。

手術しても、何をしても再び、命の火が灯る事はなかった。

けれどこの世界だと、復活もあるし、自分の命を他人に分け与える術だって開発されてる。まだ出てこないけど。

複雑だ。

心底複雑過ぎる。

「ラン？」

「あ…ああ」

どうやらいつの間にか俯いていたらしく、ネジが心配そうな眼差しを向けてきてくれた。噛んだのは不自然だけど、私はなんでもないとはかりの表情を浮かべ、綺麗に咲いている花へと視線を向ける。

「後でスケッチをしたい」

誤魔化す為もあったけど、本当に綺麗だったからそう言えば、探るようなネジの視線がほんの少しだけ柔らかくなった。部屋に置いてあるスケッチや、工房に置いてあるあの量を見れば、私が目に付

いたものを全てスケッチする癖がついているのはわかるんだろう。
こんな関係にまったく慣れていないのが丸分かりな程、後でな、
なんて照れくさそうに言ってくれた。

そこで視線を逸らして前を見る辺り、まだまだ子供だなあ、なんてほんわかしてくる。

気分を入れ替え、私は改めて日向家の建物をジツクリと観察していく。最近、成長するにつれてこうやって考え込む時間も多くなっただけど、今ここで考える必要はない。

この話しは、後でジツクリと考えよう。勿論、一人の時に部屋でスケッチを睨めっこしながらね。

少しだけ居心地の悪い沈黙。

けれど、すぐさまそれを全てなぎ払うような冷たい空気が瞬時に場を支配した。

ランセイとして会うのは初めてだけど、知識としては知っている人物——日向ヒアシ。恐らくネジにとっては最大の鬼門の人だ。
さっきまでは心配そうな表情を浮かべていたネジだったけど、今は冷めた色を瞳に宿しながらヒアシを睨みつけるようにしている。
ここに来るなら会う可能性があったのに、何故か私は会うという事をまったく考えず、ただ友達の家遊びに行くような暢気な気分ですぐここに来ていた。

ネジとヒアシの和解は、ネジが中忍試験でナルトに負けた後の話し。これから何年も先の事で、今じゃない。

そうになると、ネジはずっとこの冷えた感情を抱えていくのかと、別の意味で私は言葉に詰まらせ、二人を見ていた。

正直、本当に居心地が悪い空気が流れてる。

他人を排除し、決して間には入れさせない空気を放っているくせに、きっかけという救いを求めているかのような微妙な空間。真実

を知っているからこそそう思うのだろうか。

迷う所だけど、私が息を吸う事も忘れて場の空気に指先一つ動かせずに居たら、何故かネジが私の手首を掴み引っ張るように歩き出した。

ヒアシの隣りを通り過ぎる時に見た、驚いたような表情。

異物を見る、とかじゃなくて、ただ、純粹に驚いているような眼差し。

……あれ？

ネジに引き摺られながらも、ヒアシを不思議そうに見ていた私の耳に、ネジの盛大過ぎる溜息が届いた。

「…すまない。ヒアシ様を……本家の人間を見ると……いつも、俺はこうなる」

どうやら、私が居るという事を忘れて場の空気を凍らせた事を気にしてるらしい。

「いや。ネジの知らない一面を見れた、という事で別にいい」

子供らしからぬ一面、だけだね。

そんな事を真顔で言った私に、一瞬ネジは真っ白な瞳を瞬き、次の瞬間には顔を真っ赤にしながら口を半開きにし、何でか私の方に指を突きつけたまま震えだした。面白い反応をするなあ、なんて変わらない表情で見てたら、やっぱり震えたままネジは私に突きつけた指を力なく下に下ろしていく。

どうやら、色々と葛藤があったらしい。ネジの中で。

「相変わらず恥ずかしいヤツだな」

消え去りそうな程小さな声で言われたんだけど、意味が分からずに首を傾げてしまう。きつと、今の私の周りにははてなマークが乱舞していると思うんだけどね。

「いや、いい。深く考えなくていい。ラン、こっち…」

あの瞬間の凍えた空気が払拭されたと同時に、ヒアシが戸惑った表情のままこちらに近付いてきた。

その事によって再び、あの時の空気が舞い戻る。

「（態々追いかけてきた？ 何でだろ…）」

間違いなくヒアシはネジと…私を見てる。

私の場合容姿だけで言えば珍しい所なんて何一つないんだけど、穴が開くんじゃないだろうかと思えるぐらい見られているのは気のせいじゃないよね？

見られているから見返していた私の視線を遮るように、ネジがヒアシと私の間に立ち塞がる。ネジの背から立ち上るのは怒気だ。

けれどさっきまでのような凍えるような冷え冷えとした空気じゃなくて、今度のは熱気が立ち込めそうな程の空気。視界にいれたくもない、じゃなくて、再び視界に入ってきた事に対してあのネジが怒ってる。

ヒアシに見られた時に感じた不思議な感覚。

あれ？と首を傾げた、あの、驚いたような眼差し。

ドツと、滝のような汗が背中から滲み出て流れ出した。見える

部分に汗をかかなかったのは偶然、というよりは根性かもしれない。ナルトと戦い、ネジが負ける事によって得たきっかけ。今ならば聞いてもらえらると思つたというネジの変化。

そのきっかけを、ネジの変化に感じ取つたのかどうなのか。

まだ早いんじゃないかと、内心戦々恐々としながらヒアシを見ていたら、意味ありげに顔を歪ませた後息を吐き出し、ネジに背を向けたのだ。

「——ッ！」

それによつてネジの怒りは更に煽られ、力を込めて握られた手の平からは血が滴り落ちていく。確かに、まだ真実を話すのは早いと思つたけど……それでも……。

話す気がないなら、こういう意味ありげな態度をとつてネジを煽るな。

いい年をした大人が……！！

生前の私と同じぐらいのヒアシ。ヒアシサイドでものを考えれば、早く話してネジに分かつてほしいとは思ふよ。

けれど、常に分家と本家のいざこざを見てきたネジが、何の前触れもなく父親を失つたんだよ。無責任な事をネジに言う大人もいただろうと思ふしさ。

そんな悪意ある言葉から子供であるネジを直接守れなかった――拒絶もしただろうけど……それでもヒアシの態度は、ネジの友人としては腹ががつものだった。多分、真実を知っているからそう思うのかもしれない。

知らなければ、名家の問題だからこそ関わり合いにはならなかっただろう。けど、真実を知っていて、それをヒアシが話せないという事実を知っている私が、今こうしてネジの友人をしているのはこんな状態を放置する為じゃないはずだ。

寧ろ私が我慢出来そうに無い！

ネジの拳に無理やり布を握らせ、デコピン一発を食らわしながらも立ち去ったヒアシを駆け足で追いかける。

駆け足、というよりは瞬身だったけどね。

ヒュンつと風をきりながら現れた私に、ヒアシはどうした？と、名家らしい威厳のある表情を浮かべ声をかけてきた。

さっきまでの動揺なんて一切感じさせない表情と声。

確かに名家の当主として木の葉のタヌキたちとやりあっているだけの事はある、変わり身の早さだとは思うよ。

でも……でもさっ。

「アンタが話せないのは、否定されるのが怖いからだろ。

まだネジに話すのは早いつて思っているからだろ。

けどな、アンタが話さずにいる間、ネジはずっとずっと苦しい勘違いしたままなんだぞっ……！」

胸倉を掴み上げるような勢いで、私はヒアシに詰め寄った。大人と子供身長の関係で、掴んだのは胸倉じゃなくてお腹の辺りだったけどね。

原作は、なるべくなら維持しておこう。

イレギュラーの私がいるから、下手に手を出したらどうなるか分からない。

ああ、うん。

そんな事を思った時期も、あったよね。

日向宅訪問・2

感情のままに行動した直後、やっちゃったー、って後悔する人間はそれなりに居るのかもしれない。

でも、この行動。

気分的には胸倉を掴み上げるような乱暴な行動を、後悔する気にはまったくなれなかった。白眼特有の白い目をパチパチと動かし、ヒアシは私にされるがままになってる。

私の言った言葉が気になるのか。

それとも子供に服を掴み上げられるとは思っていなかったのか。さっきよりも私を視界に収めて、ヒアシは恐る恐ると口を開きかけた。

が、問われて答える事の出来ない転生前の知識。

実際は宵闇一族だとか、嵐誓の名を継ぐ意味だとか。

その辺りでも色々と見えたり分かったりする事はあるらしいけど、勿論この身に関わる裏事情も話せるわけがない。

転生前の知識もヤバイし、一族の秘密もヤバイって事は事情を知らない私でも流石に察する事は出来る。

だからこそ今回は畳み掛けようと、私はヒアシの服を握る指先に更に力を込めた。それに気付いてか、ヒアシも開きかけた口を閉じて私の様子を見守っていてくれるらしい。

ふう、と緊張を逃がすように軽く息を吐き出してから、私はもう一度しっかりとヒアシを瞳に写した。

不安そうに私を見つめるヒアシ。

「俺がネジの友人——」と言いつ切るにはおこがましいのかもしれない。が、本人に嫌がられても近くにいろつもりだ。ネジを、知らないという事から抜け出させてくれ。信じる、信じないは約束できないが」

わかるよ。

うん。

わかってしまうよ。

空気が読めないわけじゃないからね。

はつきりと言わないまでも、明らかに私はヒザシの残した言葉を知っている。あの時の事実をわかっている。

本来ならば私が知りえるはずのない情報。

それを当たり前のように口にした私を訝しむ気持ちもわからなくもない。けど、私はそれらを真つ向から受け止めるようにヒアシを真つ直ぐに見つめ、淡々と言葉を紡いだ。

というか、五歳の台詞じゃないよね。

言った私が言えた言葉ではないんだけど。

ぱさりと羽を飛ばたかせ、私の肩に降りた天華の温もりにホッと胸を撫で下ろしながら、私はヒアシの言葉を待っていた。

天華が居てくれれば百人力というか何と言うか。

甘えまくってる自覚はあるけど、胎児の頃から一緒にいる天華がいてくれる事に安堵を覚えるのは既に条件反射みたいなものだった。りする。

さつきから揺れているのは私が、それともヒアシか。

ゆらゆらと不安定な場所に立たされている精神状態に追い込まれそうだけど、天華が頬に擦り寄り、私の耳元で小さく鳴いた。

一瞬とも永遠ともいえる緊張状態の中、ヒアシは私に伸ばすかを迷っていた右手をゆつくりと下へと下ろした。

ぶらんと力なく地面へと吸い込まれてしまうかのように、腕は重

力に逆らう事なく落ちた状態。

そして、この気配はネジ。

私の突然の行動に驚いているのか。それとも私が言った言葉の意味とヒアシの力ない状態に驚いているのか。恐らく両方だけど、やはりネジのその疑問について私は答えようがなかった。

だから、というわけじゃないけど、私は歩きながらネジを見つめ、そしてそのまま横を通り過ぎようとした……んだけど、すれ違う瞬間にガシィッと手首を掴まれる。

んん??

「ネジ？」

これからヒアシから父親に関しての情報を得るんだよね。それは私の話を聞いてたらわかると思うんだけど、ネジは私の方を見ないまま私の身体を引きずるようにしてヒアシへと近付いていく。

離れたはずの距離が、段々と縮まっていく。

ネジも私も口を開く事無く、ヒアシの前へと立つ。私の場合はネジに引き摺られるように近付いた所為か、背中を向けてるんだけどどうやらそれは問題にはならないらしい。

隣のネジからはひんやりとした空気が流れてくるし、背中 of ヒアシからは戸惑いの空気が流れてくるわで感じる圧迫感が半端じゃない。というか、いつまで手首を掴まれてるんだろ。

「ネジ」

「……」

「聞いてくれるか？」

「……」

「あの時の事を。弟の残した言葉を……」

「……」

……さつきからネジの爪が食い込んで。一生懸命感情を押さえ込むネジは痛々しいけど、ここで口を出すような真似は流石に出来ない。

「あの時、要求を吞んで死ぬ覚悟をした」

「……」

「だが、その時にヒザシの名があがった」

「……」

更に、ネジの手に力が籠った。

掴まれている手首に痛みが走るけど、私は口を噤んだまま二人の会話に耳を傾けていた。私が無言で堪えている間も、話しはどんどんと進んでいく。私にとっては知識として元々知っていた事。

ネジにとっては初めて聞く事実。

でも、信じられないのか無言のままヒアシを睨みつけてる。

やっぱり私の右手首はネジに掴まれたままだったけど、その瞬間再び引っ張られ屋敷の奥の方へと進んでいく。足が縛れそうになり

ながらもネジの後についていったけど、その時見えたヒアシの表情はなんとも言えないものだった。

無言の私と、無言のネジ。

多分ネジの部屋だと思うけど、そこに引き摺られるようにして入った後に座布団の上に座らせられた。

とりあえずネジの行動を見守ってたんだけど、口を閉じたままネジは部屋を出て行ってしまふ。

「（……うーむ……）」

器用に私の肩に止まっていた天華だったけど、ネジが出て行った方向をジッと見つめた後、私の頬に顔を摺り寄せてきた。

《傷はどうなっている？》

私にだけ聞こえる声で語りかけてくる天華の声のトーンは、いつもよりも低い。

「大丈夫だよ」

人に聞かれたら困るから、囁くようにしながら天華に言葉を返した。

でも、不機嫌そうな雰囲気は収まらなくてどうしたものかと頭を悩ませようとした矢先に、ネジの足音が廊下に響く。

いつもだったら足音なんてさせないんだろうけど、今は感情的になっただけ音を消せなかったんだと思う。

開け放たれた出入り口に立つネジの右手には飲み物がのったお盆。左手には箱。匂いから察するにお薬の箱だなあ、なんて眺めてたら。

「すまない」

と、相変わらず子供らしくない言葉が聞こえた。

感情的になっただけでも、それを素直に表に出せないネジはやっばり不器用な子供だと思う。

眉尻を下げて申し訳なさそうに、私の右手首の傷に消毒液をかけて、包帯を巻いていくネジ。その表情から何を考えているかなんてわからないんだけどね。

「気にするな。今回の発端は俺だ」

気まずそうに私から視線を逸らすネジを真っ直ぐに見つめ、私は首を軽く横に振る。本当なら、ネジはこんなに早くに事実を知る予定じゃなかった。それを早めたのは間違いなく私で、ネジが落ち着くならこの程度の傷は当たり前……なんだけど、どうやらネジはまったく納得がいかないらしい。

「ランはどうして……いや、なんでもない」

何かを言いたげに顔を上げたけど、視線が混じる事なくネジは私の手首の治療を続ける。

「……ネジ」

「……」

「ネジ」

私の右手首の治療を終わらせたネジは、相変わらず私と視線を合わせようとしない。照れくさいけど、ここは覚悟を決めて私はゆっくりと口を開いた。

「俺は、嫌がられても近くにいます」

ヒアシには言ったけど、ネジには言っていない言葉。聞いてただろうけど、それでももう一度言ってみた。

するとネジは弾けるように顔を上げて、瞬く事も忘れたようにジッと私を凝視すると、特徴的な白眼の白い瞳に、銀の髪と蒼い瞳を持つ私の姿が映る。

うーん……未だにこの姿にはちょっと慣れないなあ、なんて。

雰囲気を見捨てるような事をふと思いつきながら、私はネジの言葉を待っていた。

日向宅訪問・3

表情が、出にくい。

勿論、私の表情の話した。

私の表情筋は頑固だ。寧ろ働く事を拒否しているのかもしれない。

特徴的な白眼の瞳には、子供らしからぬ無表情の私が映っている。ひよつとしたらこの働かない表情筋がネジに威圧を与えているのかもと、私は引きつりそうになる頬を意志の力で押さえつけながら、なんとか笑みを形作ろうとしてみた。

「まだ、お前の事はよくわからない」

が、形作った笑みは見事にスルーして、ネジが重たい口をゆつくりと開く。

やっぱり作った笑みは不自然かと、私は表情を楽なものへとかえてネジの話を聞く体勢をとる。

「正直、変わったヤツだと思う。今日の一件で、怖いもの知らずという印象も加わった」

「……」

褒め……られてはないよね？

「変わっていない所を探す方が難しい」

「……」

寧ろ落としてるのかな？

「だが」

「……？」

そこで、ネジが言葉をきった。

私を焦らすというよりも、言う言葉を選んでいるかのようなネジの眼差し。

「知り合えてよかったと——…思う」

落とした後に一気に持ち上げるネジの言葉に、一瞬で私の頬に熱が走る。自分で言った照れくさい言葉より何より、ネジに言われたこの言葉の方が照れくさい。

でも、元来ネジはこういうタイプなのかもしれない。良くも悪くも素直で、抑えているようで抑えられずに表に出てしまう。

だからこそ中忍試験でヒナタを必要以上に痛めつけ、ナルトと戦った時も一方的に言葉を投げつけた。

「俺もだ」

不器用なネジは、口下手でもある。

そんなネジが一生懸命考えて言ってくれた言葉に、私は笑みを浮かべながら自分も知り合えて良かったと、そんな意味を込めて言葉を返した。

子供じゃない私と、子供らしくないネジ。

案外丁度良いのかもしれないと、ネジの珍しい表情を見ながら満足気に頷く。

子供らしくないネジだけど、時折見せる素直な表情はやっぱり良い。

お互い照れくさい言葉の応酬で、後々恥ずかしさから七転八倒しそうだと予想は出来ても、今はこの空気を楽しむ。

照れくさいからといってこれを楽しまなければ、後々後悔しそうだしね。

ほんわかとした空気をたっぷり堪能した後、随分と冷めてしまったけどそれでも美味しさがわかるお茶をいただき、ホッと一息ついた。

うちの茶葉がまずいとは言わないけど、流石日向本家。良い茶葉使ってるなあ。

「冷めたな」

多分ネジ専用の湯のみを傾け、喉へと流し込んだネジがぼそりと呟く。

「美味いから大丈夫だ」

冷茶でも全然いけるよね。

今は喉がカラカラだから、この冷たさが逆に良い感じ何だけどさ。どうやらネジは気に食わないらしく、空になった湯飲みをお盆へと乗せて再び部屋の外へと出て行く。

何か一言ほしいけど、待っててもまったく問題はないだろう。

さつきは見る余裕がまったくなかったけど、ネジの部屋は物が少ない。本棚と筆筒。それと机ぐらいで特に何かがあるわけじゃない。本棚の本を見てみれば、忍術書ばかり。

私の部屋にもあるけど、基本的に本棚の数からして違うもんね。つまりネジとは違って娯楽系も相当の数がある。

多趣味だからと一言で済むけど、結局は移り気なだけかもしれない。

徹底したネジの書物の選び方を見ながら、ふと気になる書物の手を伸ばしかけ、やめた。

手に取るのはネジの許可をとってからだよな。

浅く広く状態の私だけど、忍術や武術、近接、暗器、それ系の事には真面目に取り組んでいたりする。

書物もそれなりに集めて読んだりしてるけど、ネジのこれは知らないやつだ。

巻物も置いてあるけど、流石にこれは何が書いてあるかまったくわからない。

興味深げに本棚を見てたら、今度はしっかりと足音を消しながらネジが煎れたてのお茶を持って部屋に帰ってきた。気配は消しきれないから、足音が消えていても今の所それ程効果のない状態。ネジの事だから時間なんかかけずに気配まで消しちゃうだろうけど。

そんなネジが持ってきたお盆の上を見てみれば、先ほどはなかったはずのお菓子の山が見えた。

「……」

少し時間がかかったのはこれが原因かとネジを見れば、無造作に包みを解いたお菓子を私の口の中へと押し込んだ。

どうやら、分かりやすく照れ隠しに走ったらしい。

「……（お茶だけにしては時間がかかったなあ、って思ったけど）」

お菓子の用意と、先程の照れが襲ってきたんだろうと思う。口の中に押し込められたクッキーを咀嚼しながら、照れくさそうに瞳を伏せさせるネジをしっかりと見てみる。

そしたらまたクッキーを押し込められたけど。

でも、さ。これも結構恥ずかしいんじゃないのかなあ。

「何だ？」

「いや……美味しいな、と思ったただけだ」

ギロリと睨みつけるように私を見るネジに、私はお菓子の感想を述べながらもとりあえずお返しを決行する為に手早く包みを外し、右手の親指と人差し指でクッキーを挟み込む。

「だからネジも食べろ」

「——ッ」

私の言葉の意味を理解するよりも先に、準備してあったクッキーを口の中へと放り込んだ。驚きと羞恥で目を見開き、顔を真っ赤にするんだけどさ……。

それ…何回もやられたからね？

流石の私も結構恥ずかしかったからね？

私の言いたい事がわかったのか、ネジは大人しく熱めのお茶を飲みながら、そつと視線を逸らした。

やっぱ、子供同士でも食べさせるのは照れるんだなあ…。

まあ、実際は違うけど心情的には同性だからね。

男の子は恥ずかしいよねえ。

新たな決意は修行を頑張ろう

「オツカレサマ」

と、闇夜に響くのはいつもよりも声のトーンを落としたナルトの声。将来的にはナルトの親友を自負する予定の私が聞いた印象としては、不機嫌さを隠しもしていない音程。

先日、日向本家でのテンを思い出すようなナルトの冷ややかな眼差し。何か怒らせる事をしただろうかと頭を悩ませてみるが、ナルトの逆鱗に触れそうな事をやった覚えはまったくなかった。

ので、聞いてみようかなと真正面から見つめてみれば、いつもよりも威圧的なナルトの態度。

「どうした？」

震えそうになる声を抑えて聞いてみたけど、ナルトはそのままふいつと視線を逸らして何故かテンと遊びだしてしまう。

「テン？ ナルト??」

私の肩からナルトの肩へと移動したテンも珍しいけど、こんなナルトも珍しい。大体、本来のナルトは挑発的な笑み。しかも自信满满的なアルカイックスマイルというヤツを浮かべているんだけどね。今日のはそれに眉間の皺というオプションが追加されてたりする。

しかし、答えそうにないなあ。

なんかテンと同盟を組んでるような雰囲気だし。

とりあえずだけど、怖い二人組みを視界から外すようにして、私は一息ついたように適当な岩の上へと腰を下ろした。

何にせよ、テンとナルトが仲良くなるのは微笑ましい。テンの話し相手は私が家族ぐらいしかいないし、ナルトの本当の意味での話し相手は私ぐらいだ。本当は、最近デレが増えてきたネジとナルトが仲良くなると安心したりするんだけど、止めておこうと思っている。原作破壊をした後だとそれはどうなんだろうと不安が過ぎる。

ネジは、ナルトと戦って真実を受け入れた。
でもなあ、ナルトの性格がなあ……。

チラリ、と横目で確認して見れば、不自然に逸らされるナルトとテンからの視線。

「ナルト。テン」

「……」

《……》

二人揃って口を噤むなと突っ込みたいが、気が合うようで何よりと思っておこう。

しかし、この沈黙は気まずいから先に今日の目的を果たしてしまおうと、私は背負っていたリュックから風呂敷に包まれたお弁当を取り出した。

「不機嫌そうな顔をしてるぐらいならこれを食べておけ」

それをナルトとテンに押し付けるように渡す。お腹が空いてると

機嫌も悪くなるし、苛々もしてくるだろうし。

多少は肉付きが良くなったような気がしないでもないナルトだけど、まだまだまだまったく全然といっていい程足りない。

鍛えているといっても五歳児の腕。ふに、と柔らかな感触を維持するのは子供の務めだろう。それなのにナルトは骨の感触に眉を顰めたくなるぐらいだ。

さも当然とばかりに押し付けられたお弁当を、ナルトはまたかと呟きながらも受け取ってくれた。

今日のお弁当は、お子様ランチ木ノ葉の里バージョンだったりする。結構な力作で、旗は日の丸じゃなくて木ノ葉とうずまきのマークだったりする。

慣れた手つきで風呂敷を解き、テンと二人で取り皿と箸の用意をしながら、私から手渡された手ぬぐいで手の汚れをしっかりと拭き取る。この辺りは私が口うるさく言っていた成果なのか、何も言わなくても拭くようになった。

「無駄に手の込んだ弁当だな」

冷めた眼差しのおまけ付き。

とは言っても、ナルトだと然程珍しくもない対応。

「ナルトに食べさせるからな」

私だけが食べるんだったら、こんなに手間なんかかけないよ。

そう思って言ってみれば、ナルトは啞然としたように口をポカンと開いた後、何でか風呂敷を広げるようにして私に投げつけた。

チャクラを練りこんでないから、空気の壁に阻まれてふわりと私の顔を覆い隠すように頭上から降ってくる。これにチャクラを練りこまれようものなら、顔面直撃だっただろうなあ……。

まあ、やらないだけナルトとの距離は縮まったんだと思うておう。

色鮮やかな風呂敷を右手で払いのけるように持ち上げ、視界を確保する。んだけど、何故か見えるのはナルトとテンの後姿。

何だ。

今日はツンの日か？

ナルトの場合はデレが判りにくいというか殆ど無いけど、今日のツンは言葉じゃなくて顔すら見せないツンか？？

ひよっとして、はぐはぐと食べてる姿を時々微笑ましげに見てたんだけど、それに気づかれたかなあ…。

それなら、今日の態度は納得なんだけどね。

まあ…食べてくれてるなら良しとしておこう。そんなわけで、私もお弁当を取り出して食べ始める。一応私もちよつとしたお子様ランチっぽくはなってるんだけどね。ナルトやテンのお弁当ほど気合は入ってない。

寧ろ、自分が食べるお弁当に旗はたてたくはないんだけど、旗を立てておかないとナルトからの突込みが入りそうだからという理由で、狐マークの旗を控えめに立てたりしてたりとかね。

味付けは大丈夫。

最近は慣れてきたからなのか、お母さんの手を借りなくても大体作れるようになってきた。お父さんのお弁当も作ってるのが功を奏したのか、私専用の小さなフライパンや鍋やおたまやフライ返しや色々作ってくれたのも大きいのかもしれない。

大人用のフライパンだと、この小さな体じゃ結構辛いしね。

ぱくぱくと然程大きくも無いお弁当を食べ終わり、用意してあったデザートをナルトとテンに手渡す。今日はトマトのデザート。

ちよつと興味があつて作り出したんだけどね。好き嫌いがはつきり分かれるんだよね。なのでいつもは手渡したら自分のを食べだしちゃうんだけど、今日は嫌いだったら困るから一口味見で食べても

らう。

「何これ？」

「トマトのデザート」

「トマトってデザートになんの？」

「なる場合もある。無理そうか？」

「……無理つつーか…無理そうつつーか……トマトはサラダの方が好きつつーか」

「じゃ、こつち。俺はそれ平気だから」

もう一つはイチゴのデザート。始めからイチゴを三つ作れと言われそうだけど、ちょっと興味があつたから仕方ない。

今度は野菜のケーキシリーズをやってみるかなあ。ゼリーだと生野菜が直にのつてるし。それでダメな人もいるしね。

「……野菜をデザートにする意味は？」

私がまた作る気なのを見抜いたのか、ナルトがぼそりと呟く。

「低カロリーで身体に優しい味だからだろ」

トマトの酸味と、生クリームの組み合わせが好きって女性もいるだろうし。私の言葉に、ナルトは低カロリーねえ、とか。味覚的に凶器だったけどなあ。とか呟いてるけどね。

あー……合わないかったのか。

それでも一口食べて吐き出さないのは、やっぱり私に慣れてくれたんだという事にしておこう。

「所で、今日は二人揃って不自然だが、何かあったか？」

会話の流れで不自然にならないように。

答えてくれそうなタイミングを見計らって突撃してみたんだけどね。

「ぶっつ」

瞬間、ナルトが噴出しましたとも。

お茶を飲んでいたというタイミングが悪かったのかどうなのかわからないけど、そんなに見事に噴出さなくても。

「別に。相変わらずランセイはオカシイっていう話をしてただけだ」

私から渡されたタオルで顔を拭きながら、ナルトがそっぽを向きながら素っ気無く答える。そんな噴出すような内容かなあ。

「ごちそうさまっ。テンカ。修行に付き合えよ」

《わかった。今日は我が鍛えてやろう》

「修行なら俺が…」

付き合うよ？

と、いつものように言おうとしたんだけどね。

「……もう少し強くなってからだろ。今の状態じゃ俺の修行になんねーし」

《ランはチャクラの扱いをもう少し学んだ後の方が良かるう》

同時に二人から言われて、見事にへこんだ私がいたりとかねっ。
そりゃナルトには及ばないしテンには守ってもらってばっかだけ
だよ。

「……………」

じい、と恨めしげに見る私なんて既に眼中に入っていないのか、
食べ終わったお弁当やデザートを風呂敷で包んで私に押し付けるよ
うに私に渡すと、二人揃ってさっさと走り出してあっという間に姿
も気配も消えてしまう。

「…………へこむなあ…………」

弱いのは事実だしなあ。

事実だけど、ついつい頭を垂れ下げてへこむ事数秒。けれど次の
瞬間にはがばつと顔をあげて、パパッと手際よく片付けを済ます。

「よし。修行しよう！」

そして、ナルトとテンと一緒に修行という名のコミュニケーション
をとるんだ！！

風呂敷を背負いながら決意を新たにするという何処か間抜けな姿
で握り拳を作りながら、私も地面を勢い良く蹴って駆け出した。

アカデミー入学・1

既に入學しているナルトやネジに遅れる事二年。ついにアカデミー入学の時がやってきた。

母さんは乗り気だけど、如何せん父さんが乗り気じゃないというか。アカデミーなんて通わなくていいじゃないかとかね。一応忍の勉強もしたいって言って訴えていたんだけど、最終的に母さんのスリッパで沈められていたのは記憶に新しすぎる。

格好としては今までのものの改良版。口元まで隠れる大きめの丸首の襟とっていいのかな。当然それだと首筋や鎖骨が見えるからその下にはもこつとした体型が判りにくい黒のタートルネック。

上着は膝下までの長さで、腰に位置をずらした濃い藍のベルトを二つ程巻いて、そこにポーチや小刀をつけられるようにしてある。下は勿論長いパンツ。ちよつと余裕があつてこれも体型のわかり難いもの。靴もデザインのにはブーツっぽいけど、色はベルトに合わせ濃い藍色。

そしてお父さんが絶対に譲らなかつたのがバンダナ。しかも左耳の上辺りから布を垂らして顔を隠すようなデザインのバンダナを特注したというかね。ゴム入りのじゃなくて、長い布になつてその都度縛るという感じ。ちなみにバンダナも藍色。

それ以外は全て真っ白という目に優しくないというか、逆に目立つんじゃないかなあつていう格好。上着のボタンも多いし。袖の部分もふんだんにボタンを使ったデザインで袖口が広がっているから着るのも慣れるまでは面倒そう。

どうしてそこまで性別を隠したいのかと思っていたら、ランは嫁にやらんとか叫んでたからただの親ばかだと思う。

っつーか、よくくのいちクラスに入らなくて良かったよね。サクラたちと同じくのいちのクラスに入って性別ばれんのかなあ、って思ってたんだけど。

普段は同じだけど、男女で分けての特別授業ってまあ、このぐらいの年齢にはある事なのかなあ。数十年前の事だからもう覚えてないんだけどね。

いつものようにテンが左肩にとまり、空いた方の右肩に鞆をかけてくるりと後ろを向く。未だに納得がいつていない父さんと、にこやかな母さん。

家のパワーバランスは母さんに偏りまくってるよねえ。まあ、困らないからいいんだけどさ。

「行ってくるね」

「ランッ。やっぱり俺も付いて…」

「かなくていい。両親に付き添われて行くのは普通の学校」

父さんの言葉を遮って切り捨てる。

殺伐とした世界に身を投じるのに、両親に付き添われて入学式なんていうものは何ていうかお断りしたいっていうかね。

泣き崩れる父さんの横で母さんはいつも通りに笑みを浮かべて。

「ラン。気にせずに行ってらっしゃい。ランなら一人で十分でしょ

うけど、駄目そうなら迷わず蹴散らして帰ってきなさいね。文句を言う人がいたなら、知名度だけはあるお父さんの名前を使うから大丈夫よ」

「……うん？　いつてくるね」

何が大丈夫なのかまったく分からないけど。

首を傾げつつも、ガラガラと音をたてて扉を開けてみたら…。

「…カカシさん」

顔だけは無駄にいいカカシ登場。久しぶりに見た気がするけど、上忍で暗部なのに何でこんな朝っぱらからいるんだろ。

「久しぶり。元気してた？」

「…カカシさんも元気そうでした。父は中に居ます」

「違う違う。今日はカシユウさんじゃなくて、ランに用事があるんだよ。というわけで」

「——ッ」

突然担ぎ上げられ、視界が一気に高くなる。別に高い場所なんて今更だけど、米俵のように肩に担ぎ上げられる視界っていうのは久しぶりで、吃驚して身体が硬直したような気がした。というか、した。

見事にぴつきーんと固まった私を他所に、珍しく何も言わない父さん。

「カカシ君頼んだよ！！　ランに何かあったら君の武器は今後無しだと思え！！！！」

「はっはっはっ。相変わらず脅しが上手いですよねカシユウさん」

「……………」

目がまったく笑っていない父さんとカカシ。というか、カカシまで
駆け出したのか父さん。どんだけ親馬鹿なんだこの人は。

けれど私が呆れた眼差しを向けるより先に、カカシが私を抱え
たまま一気に駆け出す。

自分じゃまだ出せないスピード。目まぐるしく変わる景色がとつて
も目に優しくない気がするんだけど、カカシはそんな私には気づか
ない。

「か…」

「喋らない方がいいよ。舌噛むから」

「……………」

確信犯かコイツは。

話す機会を与えたら絶対に一人で行くって思われてるんだろうね。
カカシは私に話す隙も与えず、瞬身で場所を移動していく。

「……………」

上忍に付き添われていくアカデミーってどうなんだろう。

これだと本末転倒じゃないかな。と、私は肩に担がれてる事を利
用して、そのまま前転をするようにカカシの肩から転げ落ちる。

まさか私がそんな事をするとも思っていなかったのか、珍しく本
当に吃驚した表情を浮かべて助けようと腕を伸ばそうとしたんだけ
ど、それよりも先に私は絃を伸ばして枝にぶら下がった。

「ランツ。怪我は？ 足は？ 身体は大丈夫か？？」

「カカシさん。俺の身体はもう大丈夫ですよ」

どうやら、昔のイメージが抜けないらしく、本当に心配してくるカカシに私は改めて大丈夫という事を伝えてみる。

けれど不安を隠せないカカシに、私はそつと右手を差し出してみた。

「…カカシさん、手」

うん。かーなーり、恥ずかしいんだけどね。中身はいい年した大人ですから。寧ろカカシよりも年上だから。

「……？」

意味がわからなくて眼を瞬くんだけど、私は自分の手よりも遥かに大きいカカシの手を取ると。

「折角だから歩いていこう」

素っ気無く言い切ってみる。ちょっと早口だったかもしれないけど仕方ない。照れくさいし、恥ずかしいからね。

「……うん」

そんな私の言葉に、素直にコクン、と頷くカカシ。素直なカカシは未だに慣れないけど、ミルクとかをあげて病弱に見えた私の子育てに参加してたカカシは、私に対してはこんな風になる事が多い。

親馬鹿二号…。まあ…嬉しいんだけどね。

カシユウさんに殺されそうだなあ、なんて呟いているんだけどさ。それって結構洒落にならないかなあ。

パツと見は仲の良い親子。手を繋いで歩いちゃってるしね。

そして父さんの策略にはまって性別は勘違いしてるけど、父さんにとってみたら娘に寄り付く害虫だからね。

こうなつたのつて父さんが自慢しまくつて、一緒に子育てした結果だと思つただけど。

ちなみに父さんは職業柄顔が広い。カカシとか、イタチとか、その他の上忍中忍たちからもね。その人たち全員に親馬鹿を發揮しつつ、その人たちが来る度に私を抱っこさせたり面倒を見させたりしてたから、結果私の顔も広くなつていったという…。

ひよつとして、家の外に行動範囲を広げるつて事は、昔のイメージが抜けない親馬鹿二号なカカシみたいなパターンが増えるのかなあ。

まあ…大丈夫だよな。割と皆常識的だつたと思うし。

「うんうん。健康的な手になつたよねー」

本当に嬉しそうに言うカカシ。

「…寝たきりじゃないから」

最近じゃ食べる量も増えてきたしね。

「カシユウさんと手合わせしてる所を見ると、ランはもう特別上忍でいいんじゃないかなーって思うけど、ランは下忍からやるんだよね??」

突然のカカシの言葉に、少しだけ頬が引き攣つた。

というか、一体何を言い出すんだか。

まだ下忍にもなつてないんだけど…。

「俺にそんな実力はないし、これからアカデミーに通い出す所」

「うーん。勿体無いと思つただけどなあ」

本気で首を傾げるカカシに、私は迷わずに頷く。

だってさ。ナルトやテンからはもつと強くないとナルトと修

行出来ないって言われたし。アカデミーに毛が生えた程度の実力で特別上忍とかはホント有り得ない。それにまだ怖いしね。色々と。

カカシと手を繋いで歩いてたんだけど思いの外近かったらしく、あつという間にアカデミーが見えてきた。カカシが容赦なく走ったからだろうね。自宅は里の外れのはずなのに。

流石に同じぐらいの子供たちの姿がちらほらと見え出した所で、カカシから手を離して一人でさつさと歩き出してみるんだけど、空気をまったく読む気のないカカシが私の後ろをぴったりと付いてくる。

「……カカシさん」

「諦めた方がいーぞ」

あの胡散臭い笑みで言い切るカカシ。うん。これは本当に引く気のない表情だ。

「……………」

誰か知り合いいないかな。

知り合いがいたら、一緒に行くからとか言つてカカシを振り切る理由になるんだけど。キョロキョロと辺りを見回すんだけど、居るのは知らない顔ばかり。

無理かなあ、と肩を落とした所で、ランセイって私の名前を呼ぶ声が聞こえた。

声の方に視線を向けてみれば、見覚えのある姿。

「サスケ」

あれから何度か手合わせとかをしている効果があったのか、最近では漸くまともに名前を呼んでくれるようになったサスケ。

名前を呼ぶ前は、おい、とか。お前、とか。どっかの熟年夫婦かと突っ込みたくなるような呼び方しかされなかったからね。

のんびりに見せかけて、何となく急ぎ足で近づいてくるサスケを待つ為に足を止めてみる。それに倣う様に力カシも足を止めて、じっくりとサスケを観察する視線を向けてた。

ちよつと露骨な視線に、ただでさえ眉間に寄っている皺を更に濃くするサスケは、隠す事無く力カシを睨み付けながら不機嫌そうに言葉を吐き出す。

「そいつ、誰だよ？」

「このひ…」

「俺の名前はなーいしよだよ。それよりうちはサスケかぁ。ランの友達としてはちよつと実力不足かなぁ」

私の言葉を遮って、力カシが突然サスケに喧嘩を売り始める。

「何だどっ」

ソレを迷わず買うサスケ。

「ラーン。アカデミーが退屈だったら俺に言えばいいよ」

「ランセイは俺と一緒にアカデミーに通うに決まってるだろ。おっさんは引っ込んでろよ」

「おっさ……ランセイねえ。仲の良い奴はランって呼ぶんだけどねー」

「おっさんには関係ないだろ」

「若けりやいいって問題でもないんじゃない？」

「年とつてりやいいって問題でもないよな？」

あー……収集不可能な状態に突入したような気がしなくてもないんだけど。

けれど嫌な感じに周りの視線を集めだしてて、こんな形で目立つのはまったく本意じゃない私としては、他人の振りをして立ち去りたかったりもするんだけど、そういう時に限って二人揃って同時に名前を呼びそうな予感もしてね。

隠す事無く、気が重いと言わんばかりのため息をこれ見よがしに吐き出した後。

「カカシさん。サスケ。他人の振りをされて俺に無視されるのと喧嘩を止めるのどっちがいい？」

少し不機嫌そうに、眼を細めながら言い切ってみる。

有言実行を貫いてきた甲斐があったのか、カカシとサスケが同時に顔を引きつらせながら私の方を見る。

「カカシさん。サスケは俺と同じ子供です。サスケ。カカシさんは俺では足元にも及ばない実力者だ」

カカシには、サスケは子供なんだから剥きになるなど。これだけだとサスケが怒るから、私と同じって事を強調しておく。

サスケには、カカシは私よりも遥かに実力者だという事を伝えておく。これでサスケよりもって言ったら喧嘩になる所が難しいよね。流石男の子っていう感じもするけれど。

「カカシさん……付き添いありがとう。嬉しかったです。サスケ、一緒に行こう」

とりあえずこの二人と一緒に居させるのはまずいと判断して、さっさとお礼を言って引き離す事にした。将来的にはサスケはカカシ

の教え子になるわけだし。

今から仲が悪くなっても困るしね。

そんなわけできつさとカカシを放置して、サスケと一緒に歩き出す。やっぱ人が多くなってきたから、足を止めておくだけで目立ちそうだし。

まあ…サスケと一緒にいると、カカシとは別の意味で目立つという事をすっかり忘れていたんだけどね。

アカデミー入学・2

サスケとこんな風にのんびりと歩いた事はなかったなあ、と思ったりしながら教室の中へと入ってみる。

席は自由なイメージがあるから、適当な場所というより一番後ろの席を陣取ってみた。視力は十分にいいし、多分授業はそんなに真面目に聞かないんじゃないかなあ、という気がしなくもない。

そしたら、何故かサスケも私の隣に座るといふ珍しい事が…。何ていうかこの俺の傍に近寄るんじゃないかねえよ的な、柄の悪い空気を醸し出して座っている六歳児というのが何とも言えないというか。

けれど女の子がチラチラとサスケを横目で確認しながら、こそこそと内緒話をしている所を見ると、やっぱりサスケはカッコいい！という原作でモテモテな所はここでも同じらしい。まあ、顔は美形に育ちそうだけどね。

性格はツンデレだけどね。

「何だよ？」

あまりにもジロジロとサスケの顔を観察してたからか、流石にサスケから怪訝そうな表情と声が返ってきた。

「別に。サスケは目立つな、と思ってさ」

だからなるべくなら近づかないでほしいんだけどなあ、なんてただ目立ちたくないからという理由だけでそんな言葉を口に出来るわ

けもなく。私はというと頬杖をつきながら、しみじみとサスケは人目を引くという事だけを伝えてみる。

「……人の事が言えんのかよ」

そしたら、サスケが半眼のまま呆れたようにため息交じりに言葉を吐き出した。まあ…カカシが目立つたしね。そんなカカシと一緒にいた私が目立つのも必然で。

「すぐに忘れる程度だ」

接点のないカカシの存在なんて、一週間も経たない間に忘れろと思うし。その後はのんびりとアカデミー生活を楽しんでみようかなと。

そんな意味を込めてサスケに言ってみれば、返ってきたのは溜息だった。

何ていうか……最近、サスケもこういった溜息が増えてきて、子供らしくない場面が多々増えてきたんだけどなんだろう。

肩を竦めてハッと鼻先で笑ったり、呆れた表情を浮かべながら深い溜息を吐き出す小学一年生って結構微妙じゃないかな。慣れれば、それはそれで可愛いんだけど。

……サスケの満面の可愛いらしい笑みって見てみたいかも。無邪気な笑顔も可愛いと思うんだけどなあ。

「兄貴の言った通りだな」

サスケに怒られそうな事を無表情を装いながら考えていたんだけど、突然イタチの名前が出てちょっと驚いたというかね。

「イタチさんの言った通り？」

上擦りそうになる声のトーンを落としながら、引き攣った口元を

隠す為にわざとらしく首を傾げてみる。

サスケの表情の事からうちは兄弟の無邪気な笑みはどうだろうか
と、そんな事を考えていた所でタイミングよくイタチの名前が出た
から驚いたというか……一瞬、イタチに頭の中ではアレコレまった
く別の事を考えてるって見抜かれたのかと思っちゃったよ。

動かない表情筋にこの時ばかりは感謝しながら、サスケの反応を
伺ってみる。

「……別に、ランセイは変わり者だって兄貴と話してただけだ」

「……………」

待ってみたらそんな言葉が返ってきて、ちょっとへこみかけた私
の耳に届いたのは笑いを声。

「……………」

子供特有の高い声。でも男の子の声だつてわかる程度の音。この
柄の悪い空気を醸し出しているサスケの近くに座るなんて、何て度
胸のある子供だろうかと声の主を探してみたら、思いの外近くに居
た。

というか、一段下がった所の私の目の前に座っている黒髪のツン
ツン頭。ツンツン頭といつても、上の方で然程長くもない髪をギュ
ッと一まとめに縛っているからツンツン頭に見えるだけ。

はつきり言つてこの後姿だけで誰、なんて事は十分過ぎる程分か
る。

「メンドクセエ奴かと思つたら、なんか馬鹿っぽい話してんだな」

声は幼いけど、この三白眼といいメンドクセエという台詞といい、
目の前に座っているのはシカマルだろう。

原作キャラとの絡みが多い事に頭を抱えなくなりながら、私はとりあえず不思議そうにシカマルを見つめてみた。

馬鹿っぽい会話というか、サスケにまで変わり者だって言われてちよつとへこんでただけなんだけどね。先日、ナルトに言われたばっかだし。

そんな私の視線を真っ向から返すシカマルは、意思の強そうな光を眼差しに宿しながら、私を観察するように視線を軽く流していく。多分、私が普通の子供だったら気づかなかった程度の観察。この辺りは流石IQ200。ソツなくこなすって感じかな。

「……………」

とりあえず視線を先に逸らすのもどうなんだろうという事で、じいつとそのままシカマルを見てたらサスケに脇を小突かれた。

「サスケ？」

握り拳で軽く押された程度だからまだマシだけど、グリーングリーンとされたらくすぐったいからね？

「…ランセイ」

これ以上は止めてねと、ほんの少しだけ眼を細めてサスケを見たら、やっぱり溜息混じりに名前を呼ばれた。

多いね。溜息混じらせるの。

「どうした？」

まったく子供らしくないんだからと聞いてみたら、何故かシカマルの溜息まで聞こえ出した。溜息の二重放送をされる覚えはまったくないんだけど…。

「お前が変な奴だと俺は知ってるが、他の奴はまだ知らないんだからそこまで見るなよ」

「見ないで話しをするのはどうかと思うが？」

「会話無しだっただろうが」

呆れたように言い切られる。

なんていうかバツサリと切られた感じがしなくもないんだけど、その後サスケは何故かシカマルとアイコンタクト。

人見知り激しそうに見えたんだけど、私に対して激しかった理由はただのヤキモチだったのかな？

イタチをとられるとか。そんな事しないのに、とあの時のサスケのツンツンの態度を思い出して思わず溜息が漏れてしまう。

「……」

「自己紹介でもするか」

無言のサスケとシカマルに、気を取り直して自己紹介の提案。

やっぱり無言のままだったけど、気にしていたら話が進まなさそうだから私からする事に決めてさっさと口を開く。

「俺は夜月ランセイ。趣味は色々。大体工房に籠ってるか修行のどっちかだ」

母さんと縁側でお茶を飲むという寛ぎな癒しもあるけどね。

あっさりと終わった自己紹介だけど、気にせずにサスケに視線だけで促す。

「……うちはサスケだ。ランセイとは少し前に知り合った。趣味も言うのか？ ……言うんだな。俺の趣味も修行か。ランセイを叩きのめすのが目標か。お前は？」

「……奈良シカマル。趣味っつーか、昼寝は好きだな」

軽く流しそうになったけど、何気にサスケが物騒な言葉を口にし

たよね。

シカマルの趣味は予想通りだったけど、サスケの私を叩きのめすのが目標ってどれだけ悔しかったんだろう。同じ年の私に負けた事がものすごくプライドを傷つけたんだろうけど。

「……」

自己紹介が終わると同時に重なる沈黙。

うんうん。三人とも口が達者なわけじゃないもんね。この後は何を話そうかなんて、露骨にどうしようか迷う二人も珍しいし助け舟は出したいんだけど、やっぱり私も口下手だし寡黙設定を崩したくはないし。

まあ、沈黙でも仕方ないよね。まだ会ったばかりだし。そんな事を考えながら成り行きを見守ろうとしてたら、シカマルがそういえば……と私を見上げてきた。

「……っつーか、夜月を叩きのめすのが目標って……強いのか？」

「ランセイでいい」

苗字で呼ばれる事に慣れてないから、こっそりと訂正。

「……強そうに見えねえけど」

分かったとばかりに頷きながら続けるシカマル。

「コイツは……変わり者で細くて筋肉がなくておかしくて変な奴だけど、確かに強い……が、次は俺が叩きのめす」

それに答えるのはサスケ。

殆ど悪口に聞こえたんだけど、私の気のせいかなあ……。

「まあ、変な奴ってというのは同感だけだな」

「ああ。それを分からねきゃランセイと会話するのは無理だろう」といいうか、新種の苛めだろうか。

サスケはサスケで変わり者とかおかしいとか変な奴とか言っし、

シカマルも初対面なのに同感なんて言ってるし。

単に寡黙設定なだけなんだけどね。

へこんでる私なんてどうでもいいのか、子供らしくない二人はそのまま話しを進めていく。私の名前もチラホラと聞こえる所をみると、まったく無関係ではないらしいんだけど、何となく入りにくくてそのまま廊下の方に視線を移した。

ぼけえ、としながら外を見ていれば、元気な子供たちが駆け回ってる。忍術を学ぶ為の学校って言ってもやっぱり、まだ血生臭い事には縁がないんだろうなあ。と、今後の展開を知っている私は束の間の和やかな空気を楽しむように、瞳を細めてホッと息を吐き出した。

気分はすっかりと和やかだ。これから忍になる為の学校が始まるって言うのに。

「（ほう。のんびりさん。こういう日はスケッチに行ったり、ナルトをひっ捕まえてピクニックに行ったりすれば楽しいだろうなあ）」

とは言っても無理なだけだね。

でもスケッチぐらいは出来るかな。

こそこそとスケッチ用のノートを取り出す私を見て、サスケがやっぱりと言わんばかりにジッと見つめてきた。その目、結構柄悪いと思うけど？

しかし、容姿の良い人は結局、どんな表情をしてもやっぱカッコいいんだよねー。

うんうん。サスケはそれでかなり得してるかもしれない。というか、これからもっと得をしそうな気がするよね。

アカデミー入学・3

ざわざわと、いつまで経っても静かにならない教室。

会話をするようには見えなかったシカマルとサスケを横目で見てたら、原作よりも少し若いイルカが廊下を歩いてくる。

鼻の頭の傷。

優しげな…でもまだ葛藤有りな印象を受けるイルカ表情。

イルカが担任なのかなあ、と視線で追っていたら次の瞬間にはイルカの声が教室に響いた。

「お前ら静かにしろー！！」

怒鳴るまではいかないけど、少し耳に痛いかなという大きさの声。サスケと話す為に後ろを向いていたシカマルは、面倒だと言わんばかりの表情を浮かべて前を向く。

ひょっとしてこれから自己紹介なんだろうか。

また、夜月ランセイです。のたった一言で終わる寡黙以前ただの口下手な自己紹介かなあ。

未だにちらちらと見られているサスケの場合、名前だけの自己紹介でも歓喜の悲鳴が聞こえてきそうだけど。

「俺は海野イルカ。これからお前らの担任で色々と教えるがよろしくな！」

黒板にさらさらと名前を書いた後、にかつと笑うイルカ。裏表のない笑顔。裏表と言えばミズキもこれから関わっていくんだろっな

あ…。

あ、自己紹介やるんだ。やっぱり自己紹介は定番だね。ってこの席一番最後…？

前の席に座ってる子からやり始めた自己紹介を見て、思わず溜息をつきたくなりながらも自己紹介を眺める。

これから関わり合いになるのかならないのか微妙な所だけど。

そして今更ながらサクラやいの。他にはヒナタにキバにシノにチヨウジといった原作メンバーの存在に気付く。ナルト以外は皆同時期に入学したんだ。

「おい」

「…？」

傍から見ると相当ぼけーとしてるように見えたのか、隣に座っているサスケが私の肩を小突きながら心配そうに顔を覗き込んでくる。心配そうに…？

あれ？ 何でだろう。ちょっと考え事をしながら自己紹介を真面目に聞いてただけなのに。

「あの野郎になんかされたか？」

相変わらずサスケは心配そうな表情を浮かべたまま、ゆっくりと、語尾を詰まらせるように言葉を紡いだ。

「は？」

あの野郎って誰だろう。

分からず首を傾げていると、サスケが口をへんの字に曲げながら面白くなさそうに頬を微かにだけ膨らませる。

…前はただのツンツンだったのに、可愛い反応をするようになってきたよね。

「あの銀…じゃなくて片目を隠した野郎にだ」

銀髪野郎、と言いつけたんだと思う。それだと私も同じ銀髪だから、サスケは不自然に言葉を止めて言いなおした。だからどうしてこういう風にデレが出るのかな。流石うちは。しかもイタチの弟。イタチも時々デレがきて微笑ましくて笑っちゃうよ。

けど、このままでいくと力カシの不名誉な噂が流れそうだから、それには首を横に振って否定しておく。

「違う。自己紹介が嫌いなだけだ」

口下手だからね。

挨拶下手だからね。

会話の取っ掛かりなんてわからないし。しかもサスケの後つていうのは難易度が相当上がりすぎているような気がする。

心底嫌そうな私に気付いたのか、サスケは一瞬考えるように視線を宙へとさ迷わせたんだけど、再び私に戻ってきた時には大丈夫だと言わんばかりに不敵に笑う。

「名前だけでいいだろ。色々言ってる奴もいるけど、別に興味ないし」

「……そうだな」

サスケはそれでいいと思うんだよ。顔だけできやーと悲鳴ものだからね。けど私を気遣って言ってくれたサスケに、何とか笑みを返しつつ前の方に視線を戻した。

漸く半分。えーと、何て言いながらも一生懸命自己紹介をしていく子供たち。

見てるだけなら微笑ましいよね。そこに私が混ざる光景はまったく想像が付かないけど。寧ろ混ざれないけど。精神年齢的に小学生に混ざるのはちょっとね…。

「奈良シカマル。趣味は昼寝。嫌いな事は面倒な事」

これぐらいか。と言いなながら数秒で自己紹介を終えた目の前のシカマル。興味なさそうにさっさと席に座る。

シカマルはクールだなあ。子供らしくないといえばそれまでだけ

ど、IQが高いっていうのも一因なのかもしれない。ちなみに、私の隣でつまらなさそうに自己紹介を見ているサスケの場合は、原因はイタチだろう。

イタチや父親にしか興味がないから、同世代に対して視線を向ける事さえ煩わしそうにする時がある。まあ、サスケが素直じゃないっていうのと、周りがうちはこの事で遠巻きに見るから天邪鬼が発揮されただけだろうけど。

左手で口元を隠しながら、教室全体を見渡す。

サクラは自信がないのか俯いているし、キバは赤丸を頭に乘せて騒いでいるし。シノはそれを冷やかに見つめながらも距離を置いている。

ヒナタはもじもじとしながら辺りに視線をさ迷わせて、いのはサスケをチラ見。一目惚れかな？ サクラもビクビクしながらサスケを見ているし。

「……」

「何だよ？」

モテモテだなあって見たら、流石に露骨だったのかサスケが怪訝そうな表情を浮かべながら嫌そうに口を開く。

「別に」

サスケはモテモテだね。

と、態々教えるのは無粋なのか余計なお世話なのか。

余計な事をしないでと怒られそうだから、素っ気無く答えておいた。何なんだよってサスケは怒ってたけど。

普段から視線に慣れているのか、自分が女の子の視線を釘付けにしている事には気付いていないらしい。

鈍いなあ。本当に鈍い。

どうやら生暖かい眼差しをサスケに向けていたらしく、自己紹介がサスケにまわってきた時にはサスケの機嫌は最悪的だった。

「うちはサスケ。特にここで話す事はない」

不機嫌そうに言い切り、サスケはこれ以上話す事はないとばかりに椅子に座る。座る時に小さな声で前を向いてるって言われたし。やっぱりこの微妙な視線に気づいたらしい。まあ…露骨に見てたから気づくだろうけど。そしてサスケが終わったという事は、次は私の番だよね。

はあ、と勝手に漏れる溜息。だけど、これさえ終われば後は空気になれるから頑張れ自分と叱咤しつつ、私は全体を見渡すように視線を移動させる。

サスケの後が悪かったのか、皆の視線がこつちを向いている事に内心涙を流したくなるけど、それを表に出すような表情筋はしていない。

「夜月ランセイ。趣味は読書。他、色々…か」

鍛冶もだけど、態々言う必要はないよね。そうするとこれぐらいかな。チラリとサスケの方を見たら、もう十分だとばかりに頷かれたから遠慮なく椅子に座る事にした。

ふう。

あんまりというか全然喋れなかったけど、既に皆の視線は私から外れてるし問題はないかな。

…というより、このクラスは個性的な子供が多いから、私が埋没して目立たないだけかもしれないけどね。

廊下での邂逅

入学式。そして自己紹介というある意味最大の難関を終えた後のアカデミーは、特にどうという事もなく時間が流れてた。

勉強も忍術も既に父さんとかイタチとかカカシとか。その他色々な人から聞いてたから特に目新しいものもないし。

そして当たり前だけど、子供が多い。大人といえば教師ぐらい。今も右を見ても左を見ても外を見ても、子供が遊んでる。

こういう光景を見ると、普通の学校と何にも変わらないのかな、と思わなくもないかな。将来的にはここから下忍になる子供もいるわけだけど、このクラスから下忍になれるのはある一部の子供だけだろうし。

なんていうか、それを考えると忍の世界って実力主義だよな。

「何を見てるんだ？」

ぼけっとしながら忍の世界云々や子供ばっかだな、なんてどうでもいい事を考えてたんだけど、そしたらサスケが私の視線の先に目を向けながら聞いてきた。

入学式の時から、サスケの positioning は何故か私の横。

シカマルも前に座っているんだけど、今は机に突っ伏して目を閉じてるのかな。眠ってはいないみたいだから。

「無邪気だな、と思ってな」

六歳児が無邪気に遊んでる光景が眼下に広がってるし。

ネジやナルトやサスケを見慣れると、ここにいる子供たちが異様に子供っぽく見えてくる。本当は逆なんだけどね。

「そうだな」

珍しくサスケも同感とばかりに頷いてくれる。

「で、他には？」

そして、何でかジト目で続きを促された。

サスケの眉間に皺は癖だよね。どう見ても癖になっちゃってるよね。

「他？」

アカデミーに入学したばかりで、下忍になれる人たちの事を考えたなんて言えるはずもなく、私は逆にサスケを見てみた。

その途端、サスケの眉間の皺が濃くなる。

だから将来的に本当にそれが癖になると思うんだけど、今のサスケに言った所で尚更濃くするだけだろうし。

「いつも誤魔化すんだな」

サスケの将来の眉間を心配したら、寂しげな光を宿したサスケと目が合った。つい最近まではツンばかりだったのに、アカデミーに入学してからというもののこういう視線が増えた気がする。

まるで雨の日に捨てられた子犬のような……サスケの場合は猫かな。

けど、考えてた事を正直に話せないから、一瞬だけサスケから視線を外しながら色々取り繕う。

そろそろアカデミーに慣れてきたし、ネジに会いに行くのもいいかもしれない。

外では当たり前のように会っているんだけど、やっぱりお互いが学校に通い出してから会う時間が減ったんだよね。

そして最近のネジはデレが多いから、ちょっとだけツンも見たいなあ、なんて思うし。

「知り合いに会いに行こうか迷ってた」

はじめはサスケに納得して貰う為だけだったんだけどね。暇だし本当に会いに行こうかな、なんて思ってたら急に服を引っ張られて転びそうになる。

「……サスケ」

犯人は勿論サスケ。
何故か私の服を掴んで歩き出してる。

「俺も行く」

「……ん？」

俺も行くって…。

「俺も、その知り合いに会いに行く」

「……」

今現在だけど、ネジと気が合うとは思わないんだけどなあ。

だけどサスケは会いに行く気満々らしく、無言の私を引きずるようにドンドンと歩いていく。どうやら本当に引く気はないらしい。

誰か助けてくれないかなって教室を見てみたけど、いつの間にか顔を上げたシカマルに追い払うように右手を振られた。「気をつけて行けよー」というやる気のない声と共に。

まったく助ける気がないのか、眠たそうに欠伸を噛み殺しながら再び机に突っ伏す。それと同時に聞こえる寝息。

今回は本当に眠るつもりなのか、不自然じゃない寝息が辺りに響いた。

ひよっとしたら、話し声が煩くて眠れなかったのかもしれないなあ。まあ、シカマルがサスケに言ってくれたとしても、サスケは引かないとは思っただけ。

ズルズルと引きずられながら歩いていただけ、いつも以上に注目を集めている事に気づいて慌ててサスケの手首を掴んだ。

「歩く」

私に掴まれた手首を掴みながらサスケが目を見開く。

痛くはないだろうけど突然掴まれて驚いたのか、サスケの足が完全に止まって私を見てきた。

歩くだけじゃ言葉が足りなかったかな。

「重たいだろ」

それに恥ずかしいしね。

「そうか？」

「……」

なのに、サスケにとってみたら私ぐらい引きずるのは簡単なのか、本当に不思議そうに首を傾げられた。

「ああ。取り合えず……」

ネジのいる場所に向かう。

そう思ってたなら、後ろから聞き馴染みの声が響いた。

「何をやってるんだ？」

「「……………」」

ネジの声。

聞き間違えるわけがないから、間違いなくネジの声なんだけど、何処か呆れたような視線を向けられる。私が思っていたよりも目立つたらしい。

「…ネジも珍しいな」

この流れでネジに会いに行こうとしてたなんて言いにくくて、つい誤魔化すような言葉をネジに向けてしまう。

けど、ネジがここにいるのは珍しいというか、ここで会うのは初めてだよ。教室からさほど離れていない廊下だし。

「……」

途端に無言になるネジ。

ちなみに、一言も言葉を発しないサスケは人見知りを発揮してか、ネジを睨み付けてたりしてる。

相変わらず初対面の人は睨むんだね。睨んでるんだけど、柄の悪いサスケの視線を見事にスルー出来るネジも凄いつていうか…。スルーされてる事に気づきながら尚更眉間の皺を濃くするサスケも懲りないっていうか。

この空気を打破するのは私なのかな。嫌だなあって思ってたなら、ふいつとネジが視線を逸らした。何処となく頬が赤いような気がする。

「……………随分と慣れたと聞いた」

「…………？」

私も言葉は少ないけど、ネジも少ないよね。

「だから、顔を見ようかと…………」

「そうか……俺と同じだな」

ツンなネジを見ようかと思ってただけど、学校で会ってもデレなネジは変わらないらしい。やっぱ一度友達になると漫画のような高圧的な態度は見せないのかな。それはそれで嬉しいんだけど、どうしてかサスケの表情が極悪に変化した。

そしてネジまでそれを真っ向から受け止め、不機嫌そうにサスケを睨み返す。

「……」

私が入り込めない独特の空間を作り上げて睨みあうサスケとネジ。どうしようも途方にくれながら肩を落とす私には気づかず、睨み合いが段々とエスカレートしていくんだけど、流石に刃物沙汰は止めた方がいいよね。

手合わせなら兎も角、ここは学校内だし。

「それ以上は、力づくで止めるぞ」

溜息混じりに言えば、辛うじてクナイからは手を離してくれる。が、睨み合いをやめる気はまったくないらしい。

予想通りといえば予想通りなんだけどね。

ネジとサスケってやっぱり相性が悪いんだなあ…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4316s/>

幻の月は空に輝く

2011年10月6日15時37分発行